

研究報告

『国土教育』（その2）高等学校地理歴史科教育を考える —歴史の深層としての「国土」、その構造と未来への展望—



森田 康夫

技術・調達政策グループ
首席研究員

はじめに

現在、われわれが享受している豊かで安全な生活は、われわれのご先祖様が農業基盤や交通基盤を整備し、川を治め、水資源を開発するなど、絶え間なく国土に働きかけることによって、国土から恵みを返してもらってきた歴史の賜物である。

従って、現代に生きるわれわれの世代も、国土に対して働きかけを続け、将来世代に対して、より良い社会基盤を引き継いでいかなければならない。そのためには、われわれ日本人の国土への働きかけの歴史について、また世界の国々の国土への働きかけの成果や現在の努力について、不断に学び続けることが求められている。

こうした基本認識のもと、前号（JICE REPORT vol.16）では、『国土教育』の観点から、戦後の義務教育である小中学校の社会科教科書の検証を行うとともに、これを踏まえた次世代教育論（私論）を展開させていただいた。

本稿では、（1）前稿に引き続き、戦後の高等学校の地理歴史科教科書を『国土教育』の観点から検証するとともに、（2）必須科目である「世界史」を取り上げ、フランス・アナール派の歴史学「歴史地理学」との違いを明らかにすることにより、高等学校世界史教育の改善の方向性に関する提案を行う。

高等学校地理歴史科教育と「国土」

1 戦後高等学校社会科教育の流れ（学習指導要領の変遷）

戦後、昭和22年度から同37年度まで「社会」（同30年度までは「一般社会」）のみが必修科目とされて

いた。これは当時、わが国では、民主主義社会の仕組みを学ぶことが最優先課題とされていたためであるが、一方で、同23年10月には選択科目の一つとして、GHQ占領下において禁止されていた「日本史」が復活している。

学習指導要領の変遷（概要）は以下の通りであるが、ここで注目したいことは、戦後の学習指導要領において、『国土教育』に関係の深い地理歴史3科目（「地理」「世界史」「日本史」）がいずれも必修とされていたのは、昭和38年度から同47年度までの10年間だけであったことである。

平成6年度以降の地理歴史科においては、「①日本史は中学校までに学習しているが、世界史は日本史の背景としての学習に留まっている。②国際化への対応には世界史の学習が必要である。」という理由から、「世界史」のみが必修とされ、「日本史」と「地理」はいずれか1科目の選択とされている。

その結果、「地理」履修者は全高校生の半数以下、という状況が現在まで続いているのであり、「地理」を重要視しない現在の学習指導要領の枠組みのままでは、空間的思考力を欠いた日本人がどんどん増えていくのではないかと、ということが危惧される（詳細は、本章第3節を参照）。

ちなみに私は昭和41年3月生まれなので、昭和48年度施行の学習指導要領に基づく教育を受けた。高等学校社会科では「地理A（系統地理）」「世界史」「倫理・社会」「政治・経済」の4科目を学んだのだが、大学受験（当時の共通一次試験）で選択した科目、「地理A」と「倫理・社会」以外の学習記憶は、残念ながらゼロに等しい。

■ 昭和22年度版／学習指導要領（試案）

- ・ GHQによって、戦後禁止されていた修身（公民）・歴史・地理が新教育制度出発とともに社会科として再生され、昭和23年4月より授業が開始された。
- ・ 必修科目の「一般（総合）社会」は、生徒が社会生活の中で出会う問題を中心に単元を構成し、その問題の解決をめざして多面的総合的に学習をさせる科目として設置された。

- ・選択科目は、「時事問題」「人文地理」「西洋史」「東洋史」から1科目選択とされた。

■ 昭和26年度版／学習指導要領（試案）

- ・選択科目の「東洋史」と「西洋史」が「世界史」として統合され、かわりに「日本史」が選択科目の一つとして位置づけられた（戦後、日本史教育の復権）。

■ 昭和31年度版

- ・「一般社会」と「時事問題」が統合され新しい科目の「社会」（必修）となり、倫理的内容が強化された。
- ・選択科目は、「人文地理」「世界史」「日本史」から2科目選択とされた。

■ 昭和35年告示、昭和38年施行

- ・「社会」が、「倫理・社会」と「政治・経済」に分けられ（いずれも必修）、「倫理・社会」は高校における道德教育の中核として位置づけられた。
- ・「地理」「世界史」「日本史」という3つの地理歴史科目が全て必修科目として位置付けられた。
- ・高校進学率の急上昇に対応して「世界史」と「地理」がA・Bの2科目に分けられ、高度経済成長下で生徒の能力、適性、進路に応じて選択できるようになった。

■ 昭和45年告示、昭和48年施行

- ・地理歴史科目については、「地理」「世界史」「日本史」から2科目選択となった。
- ・前回の改訂を見直し、「世界史」のA・Bがなくなり、「地理」が系統地理的内容の「地理A」と地誌的内容の「地理B」とに分けられた。

■ 昭和53年告示、昭和57年施行

- ・昭和51年12月教育課程審議会答申（以下「教課審答申」という）によって、ゆとり教育が提言され、高等学校の履修最低単位数が大幅に削減されるとともに、1学年の必修科目として「現代社会」が新設された。

■ 平成元年告示、平成6年施行

- ・昭和62年12月の教課審答申によって、社会科は大きく変わり、高校「社会科」は「地理歴史科」と「公民科」に再編成されるとともに、「世界史」が必修科目として位置付けられ、一方、必修であった「現代社会」は選択科目となった。
- ・「世界史」「日本史」「地理」がA(4単位)・B(2単位)

位)の2科目に分けられ、生徒の能力、適性、進路に応じて選択できるようになった。

■ 平成11年告示、平成15年施行（現行学習指導要領）

- ・学校完全週5日制の下、ゆとりの中で特色ある教育を展開し、生きる力を育成することをねらいとして、「総合的学習の時間」が創設された。
- ・その一方で、必修教科・科目の最低単位数の縮減等の改訂が行われ、「現代社会」の単位数が4単位から2単位に縮減された。

表－1 学習指導要領の変遷（高等学校社会科）^{2) 3)}

	高 等 学 校		
	1年	2年	3年
昭和22年度版	一般社会 5(必須)	時事問題 5 人文地理 5 西洋史 5 東洋史 5	1科目 選択
昭和26年度版	一般社会 5(必須)	時事問題 5 人文地理 5 世界史 5 日本史 5	1科目 選択
昭和31年度版	人文地理 3～5 世界史 3～5 日本史 3～5 (必須) 社会 3～5		2科目 選択
昭和35年告示 昭和38年施行	地理 A 3 地理 B 4 世界史 A 3 世界史 B 4 (必須) 日本史 3 (必須) 政治・経済 2 (必須) 倫理・社会 2		1科目 選択 1科目 選択
昭和45年告示 昭和48年施行	地理 A 又は 地理 B 3 世界史 3 日本史 3 (必須) 政治・経済 2 (必須) 倫理・社会 2		2科目 選択 (地理A＝ 系統地理 地理B＝地誌)
昭和53年告示 昭和57年施行	現代社会 4 (必須)	地理 4 世界史 4 日本史 4 政治・経済 2 倫理 2	選 択
平成元年告示 平成6年施行	地理歴史科 公民科	世界史 A 2 世界史 B 4 日本史 A 2 日本史 B 4 地理 A 2 地理 B 4 現代社会 4 政治・経済 2 倫理 2	1科目 選択必修 1科目 選択必修 現社：また は政経倫理 の選択必修
平成11年告示 平成15年施行	地理歴史科 公民科	世界史 A 2 世界史 B 4 日本史 A 2 日本史 B 4 地理 A 2 地理 B 4 現代社会 2 政治・経済 2 倫理 2	1科目 選択必修 1科目 選択必修 現社：また は政経倫理 の選択必修
総合的な学習の時間			

2 「地理B」「日本史B」「世界史B」の教科内容

次に、『国土教育』に関係の深い地理歴史3科目（「地理B」「日本史B」「世界史B」）それぞれについて、各科目の具体的内容を検定済教科書をもとにレビューした結果を以下に示す。なお、レビューで用いた教科書は、平成22年度の東京都立普通科高校で採用数最上位の教科書（「地理B」は52校／116校で採用された帝国書院の「新詳地理B初訂版」、「日本史B」は93校／165校で採用された山川出版の「詳説日本史改訂版」、「世界史B」は77校／179校で採用された山川出版の「詳説世界史改訂版」）、及びこれらの教科書と出版社を同じくする過去の検定済教科書である。

2-1 地理B

ここでは、現行の平成18年検定済教科書（私の子供達の世代が学んでいる「地理B」教科書）と昭和53年検定済教科書（私自身が学んだ「地理A(系統地理)」 「地理B(地誌)」教科書）、及び昭和31年検定済教科書（戦中戦後に生まれた方々が学ばれた「人文地理」教科書）を対象として、「国土の自然条件・社会条件の違い」や「国土への働き掛けとそれに対する国土からの恵み」に関連する記述を取り上げ、「地理」が『国土教育』に果たしている（果たしてきた）役割について比較・検証した。

表-2は、これらの教科書の目次を整理したものであるが、学習項目だけで比較すると、この半世紀間の地理教科

書には、大きな差異は認められなかった。なお、現行の教科書「地理B」では、系統地理的内容と地誌的内容とが統合されていて、両方を一つの教科書で学ぶこととなっているが、私が高等学校で学んだ時代は、「地理A(系統地理)」と「地理B(地誌)」が別科目として区分され、多くの学校では地理の授業は「地理A」のみを教えていたため、大学受験（共通一次試験）で「地理B」を選択する場合は、改めて独学でこれをカバーしなければならなかった（私もその一人である）。

現行の教科書を読み下してみると、学習指導要領が示す3つの大きなテーマ、「(1)現代世界の系統地理的考察」、「(2)現代世界の地誌的考察」、及び「(3)現代世界の諸課題の地理的考察」の単元だけでなく、全篇を通して出来るだけ多くの事例地域を取り上げることで、世界各国の地誌的学習が幅広くできるよう工夫されていることがわかる。これは、前号で考察した中学校の「地理分野」教科書の内容が、ごく一部の国の地誌しか学ぶことができない（例えば、東京書籍の「新編 新しい社会 地理」では、世界の地誌については、アメリカ、中国、フランスについてはしっかり学べるが、あとはブラジル、マレーシア、オーストラリア、ガーナについて補足的に学べる程度で、それ以外の国については全くふれられてもいない）といったこととは対照的である。

特に、冒頭、第1章・第1節において、アンデス山脈に住む人々やオランダの干拓地（低地）に住む人々の暮ら

表-2 高等学校地理教科書の内容の変遷（目次）

	「人文地理」 S31年検定済、S32年発行	「高等地理A(三訂版)」系統地理 S53年検定済、S54年発行	「高等世界地理B(三訂版)」地誌 S53年検定済、S54年発行	「新詳地理B」 H18年検定済、H22年発行
全頁数	319頁	282頁	276頁	331頁
目次	第一章 人類の自然的環境としての世界 第一節 気候的環境としての世界 第二節 地形的環境としての世界 第三節 土壌の生成 第二章 世界産業の地域構造 第一節 世界農業の地域構造 第二節 世界牧畜の地域構造 第三節 世界水産の地域構造 第四節 世界林業の地域構造 第五節 近代工業の地理的基礎 第六節 工業の立地条件とその地域構造 第三章 総合開発 第四章 居住地域と集落構造 第一節 世界各地の人口分布 第二節 村落と都市の構造 第五章 世界の現実とその結合 第一節 民族 言語 宗教 第二節 世界の国情 第三節 交通、通信網 第四節 世界貿易の交流 人文地理のまとめ	第Ⅰ部 生活と環境 第1章 地理と地図 第2章 自然環境と自然地域 第Ⅱ部 人口と居住 第1章 人口 第2章 村落と都市 第Ⅲ部 資源と産業 第1章 農・林・水産業 第2章 鉱・工業 第3章 商業・交通 第Ⅳ部 現代世界の諸問題 第1章 環境保全と国土の再開発 第2章 世界の人口と食糧の問題 第3章 世界の資源開発と保全 第4章 世界貿易と南北問題 第Ⅴ部 国家と世界 第1章 国家 第2章 世界と日本	第Ⅰ部 人間と地球 第1章 環境としての自然 第2章 人間の集団 第3章 世界の人口と居住地域 第Ⅱ部 世界の諸地域 第1章 アジア 第2章 太平洋とそれを囲む 新大陸の諸地域 第3章 ソ連とヨーロッパ東部 第4章 ヨーロッパ西部とアフリカ 第Ⅲ部 世界と日本 第1章 世界の農林水産業と日本 第2章 世界の工業と日本 第3章 世界の資源と日本 第4章 世界の交通と貿易 第5章 国際協力と日本	第Ⅰ部 自然と生活（系統地理） 1章 自然環境と生活 2章 資源と産業 3章 生活と文化 第Ⅱ部 世界の諸地域（地誌） 1章 市町村規模の地域の調査 2章 地域をみる方法 3章 国家規模の地域の調査 4章 州・大陸規模の地域の調査 第Ⅲ部 グローバル化する現代社会 1章 近隣諸国の研究 2章 結びつきを強める現代世界の諸課題のとりえ方 3章 地図でとらえる現代社会 4章 地域区分でとらえる現代世界 第Ⅳ部 地球的な課題 1章 人口・食料問題 2章 都市・居住問題 3章 環境・エネルギー問題 4章 民族・領土問題

1 章 自然環境と生活

1 節 生活の舞台としての地形

私たちの生活は、環境としての自然から直接・間接の影響を受けている。たとえば山地は、人間や物資の交流を妨げることが多いため、しばしば民族や文化の境界となり、国境や行政区界にも採用されてきた。海は交通路として役だつので、海岸線の出入りの程度も、住民の生活や文化に関係が深い。

世界には、けわしい山地もあれば、低くて平らな平原もある。さまざまな環境のなかで、人々は自然の恵みにあずかり、またときには自然災害に見舞われながらも、くふうを重ねてくらしを営んできた。そのような人々の生活と自然のかかわりには、自然環境の違いによってどのような特徴がみられるのだろうか。まずは、特徴のある地形と生活のかかわりについてみていこう。



図-1 現行高等学校「地理B」教科書／第1章・第1節の下り①⁶⁾



図-2 現行高等学校「地理B」教科書／第1章・第1節の下り②⁶⁾



図-3 日本とイギリスの地形の比較⁶⁾



図-4 ドイツと日本の政治・経済機能の分布⁶⁾

しを紹介しつつ、「世界には、けわしい山地もあれば、低くて平らな平原もある。さまざまな環境のなかで、人々は自然の恩恵にあずかり、またときには自然災害に見舞われながらもくふうを重ねてくらしを営んできた。」とする下りから、この「地理B」という科目が、世界の国々の国土への働きかけの歴史について、またその成果や現在の努力について学ぶ上で、重要な役割を果たしていることがわかる。

また、「日本とイギリスの地形の比較」や「ドイツと日本の政治・経済機能の分布」など、彼我の差を比較して考察している図表や、日本の国土の特徴とこれに起因する災害の特徴、そして災害を防止するための様々な取り組みに関する一連の（6頁を通した）記述は、『国土教育』を実践する上で優れた材料であるといえる。

次に、人文地理を構成する主要項目で、「国土」との関連性の深い、経済地理、都市、交通、国家にフォーカスを当て、「産業（農業等）は国土への働きかけであること」、「都市の発達と機能」、「交通の発達と機能」、そして「国家」について、それぞれの教科書が如何に説明しているかを比較・検証した。

（1）産業（農業等）が国土への働きかけであることの説明

現行教科書においても、経済地理の冒頭が、「これまで人間は、自然環境にどのような働きかけをして、産業を発達させてきたのだろうか。」という問いかけから始まり、続く「農作物の生産と流通」で、「人々は、水の乏しい地域では灌漑を行い、気温の低い地域では寒さに強い品種を開発するなど、自然条件を克服し、栽培地域の拡大に努めてきた。」と記述するなど、国土と人間と経済との関係をできるだけわかりやすく説明しようとする努力の跡が見て取れる。

しかし、昭和31年検定済教科書では、農業だけでなく、牧畜、水産、林業、そして工業に至るまで、教科書（経済地理分野）で取り上げられている全ての産業について、記述の冒頭部分で、それぞれの産業と国土（地理的条件）との関係がしっかり説明されていたのである。特に、経済地理の冒頭（3頁弱）の記述に優れた内容があるため、以下に関係する全文を掲載したい。

第二章 世界産業の地域構造

第一節 世界農業の地域構造

トナカイを追い海獣を捕えて生活するエスキモー人やサモエード人、ラップ人などは、つねに原始的な掠奪経済による、きわめて低い生活をくり返している。モンゴールや中央アジアの草原から草原へ移り歩く遊牧民たちも同じである。ボルネオやスマトラの奥地の未開な住民の間では、移動農業から定着農業へと進むにつれて生活への安定を築き、ついには栽植農業への糸口をつくったし、かつてのアラビアやバビロニアの半乾燥地に定着した農民たちは、灌漑のために低い河水を汲みあげることをくふうし、耕作のために天文や暦を研究したといわれている。

このように、農業に基礎をおいている住民の間では、狩猟生活や遊牧生活にくらべて生活が安定しており、また農耕の必要からつねに文化的に進展する可能性があることが見出される。

最近、人口の増加が著しく、ことに工業の発達によって、都市集中の傾向が強くなり、多くの大都市が発達した。これらの大都市に住む多くの人々は、食料はもとより工業の資源も農業生産者によらなければならない。人類の生活は農業と不可離の関係にあるといえる。

1. 農業の地理的制約

農業と環境 農業は自然環境、ことに気温と雨量を中心とする気候に、もっとも多くの制約をうける産業の一つである。世界の農業地域の中にはシベリア平原、中央アジア草原、チベット高原、アンデス山地などのように、地理的制約をうけて、わずかしかな耕作することのできないところもあれば、不利な自然の制約を克服して国土の大半を耕地にしているオランダやベルギー、フランスのような国々もある。わが国の稲作についてみても、低温涼冷なところでは裏作もできない。また湿田、半湿田では水害の状態と深く関係するし、作付率も西南日本と東北日本では差がある。また、山地と生産力との関係にしても、労働者や肥料の保有度、日照時間などほとんど説明を要さぬほど耕作状況の差が地域差となってあらわれている。しかし中央高地にみられるように、高冷地農業という特殊な農法によって耕地化をはかっているし、埼玉や千葉、神奈川の諸県などの大都市周辺では、高度な農業生産様式がとり入れられている。このような自然現象が、たんに制約を与え、影響しているということだけでなく、これが人類生活におよぼす面と影響の与え方においてみなければならない。ようするに、自然環境を人類の社会的な生活の条件として問題にし、その影響の実際的なあらわれ方に応じて自然をみることである。人類のたゆまぬ努力は、自然をとおして、もっとも合理的で能率的な社会をつくるにある。イギリスは産業革命後農民は年々減少し、今日では全国民のわずか5%にすぎないが、国内の食料の半ばを生産している。これは近代的な農法や機械力や肥料の投下などによるものである。過剰人口をもつ国々の間では、移民政策によって人口の適正化をはかっている。イタリア、スペイン、イギリス、中国、日本などは母国を離れて移住地域の環境に適応し、新しい文化を吸収して独特の生産をあげている。ブラジルのコーヒー、アルゼンチンやオーストラリアの小麦、コロンビアのカカオなど、市場性の強い単一作物の生産がなされている。わが国の農業発展をみても、古代から平安時代ごろまでは、かなり大規模な耕地を残していた。それが人口の増加に伴って、耕地の細分化から集団化へと移って、ついに小農経営の形態になったのである。人口の多少、経営組織、形態などが、農業とどのように結びついてきたかをきわめてゆくとところに人文地理学習の効果がある。

なお、農業の代表的事例としてデンマークを取り上げ、「酪農王国といわれるデンマークは、今日の基礎をむしろ過去100年来の国民のたゆまぬ努力に求めなければならない。恵まれない自然環境を克服して、ここに主穀農業から乳牛の導入、改良した農業形態に入ってしまった。（中略）、今日では世界における農牧王国、協同組合の祖国として知られ、世界的輸出国となっている。」と説明してい

る部分は、優れた『国土教育』の教材であるといえる。

(2)都市の発達と機能に関する説明

昭和31年検定済教科書では、集落や村落の成立過程（歴史・地理的条件）の部分に、昭和53年検定済教科書では都市の成立過程の部分に、そして現行の教科書では、都市の抱える問題とその対応の部分に重点がおかれているという点で、時代背景に応じた違いは確かに認められるものの、いずれの教科書においても、村落や都市が如何に成立し発展してきたか、村落や都市にはどのような機能があり、またどのように違うのか、といった内容が多くの頁を割いて説明されている。

(3)交通の発達と機能に関する説明

時代を反映してか、昭和31年及び昭和53年検定済教科書では、陸上交通（道路、鉄道、自動車）と水上交通（内陸水路、海上交通）にウエイトがあり、現行の教科書では、航空交通に重点がおかれた記述となっている。しかし、「交通の発達と機能」全体の記述として見た場合、頁数が大幅に削減されていることもあって（14頁→6頁→3頁）、「交通」が「国土」「都市」「経済」を繋いでいること、そしてあらゆる人間活動を支えるネットワーク型インフラであること、こうしたことが地理教育の中で学びにくくなっていることは否めない。

(4)国家についての説明

昭和31年検定済教科書では、「世界の住民と地理的環境との関係を調べていく場合、住民が属している国とその地理的環境との関係をみるのでなければ、世界の実情を明らかにする上に十分とはいえない。」との前提に立って、「国家」とその構成要素である「国土」及び「国民」のあるべき姿を論じている。

例えば、「国家」については、「国という有機体において、国土と国民は統治を通じて一体化されているのである。」「国はその国民をつくっていかこうとする意欲と情熱をもっているものでなければならない。」と論じ、「国土」に関しては、「国土としてまとまった統一あるものに組織されて行くには、国の力が問題となる。すなわち国の位置、形、大きさ、経済力、軍事力、その民族の文化的社会的な強さの総合されたものが国力である。」、そして「国民」については、「国力を決定づけるものとして、国

土の広さと共に、国民人口とその素質および国民の国家意識があげられる。」と語っている。

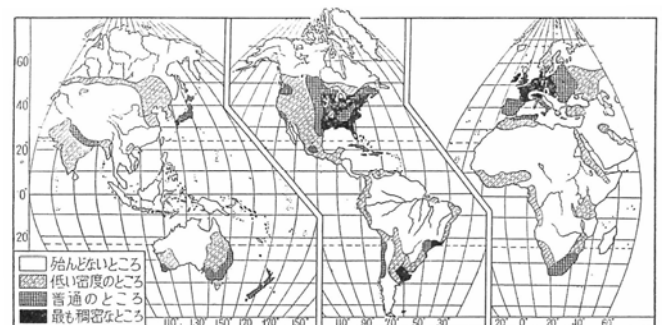
特に、冒頭6頁弱の連続した記述（国の構成、国土の形と面積、国民）に優れた内容があるため、以下に関係する全文を掲載したい。

なお、昭和53年検定済教科書にも、現行の教科書にも、「国家」を論じる箇所はあるが、関連する用語の定義が記述されている程度でしかなく、ここで取り立てて紹介すべき内容は見あたらない。



近代の計画都市
バルノバ（イタリア）ベネチアの都市国家が、16世紀にオスマン・トルコに対して築いた、ヨーロッパでもっとも美しい星形の要塞都市。町割りの直径は約800m。現在の住民は農民が多い。
カールスルーエ（西ドイツ）（Diercke Weltatlas 1971年版）バーデン・バーデン・ベルサイユにならい、1715年に建設された都市。バロック様式の宮殿をかなめとして、扇形状に市街地がつくられた。

図－5 都市の発達（S53年検定済教科書記載）⁷⁾



図－6 世界の鉄道密度（S31年検定済教科書記載）⁹⁾

表－3 高等学校地理教科書の内容の変遷（主要4項目）

	昭和31年検定済教科書「人文地理」	昭和53年検定済教科書「高等地理A」	平成18年検定済教科書「新詳地理B」
産業（農業等）が国土への働きかけであることの説明	○世界農業の地域構造(4頁) 「人類のたゆまぬ努力は、自然を通して、もっとも合理的で能率的な社会をつくるにある。」 「酪農王国といわれるデンマークは、今日の基礎をむしろ過去100年来の国民のたゆまぬ努力に求めなければならない。」 ○世界牧畜の地域構造(2頁) ○世界水産の地域構造(3頁) ○世界林業の地域構造(2.5頁) ○工業の立地条件とその地域構造(7頁)	「この産業（農・林・水産業）は、土地・森林・水域を生産の場所とし、その利用する植物・動物の生活環境に従って自然の作用と密接な関係にある。」 「作物の栽培範囲は、品種改良や栽培技術のくふうなど長年にわたる人間の努力によって拡大されてきた。」	○産業と自然のかかわり(1頁) 「これまで人間は、自然環境にどのような働きかけをして、産業を発達させてきたのだろうか。」 ○世界の農業の分布(1頁) 「人々は、水の乏しい地域では灌漑を行い、気温の低い地域では寒さに強い品種を開発するなど、自然条件を克服し、栽培地域の拡大に努めてきた。」
都市の発達と機能に関する説明	■村落と都市の構造(26頁) (1) 集落の位置 ・水と集落 ・集落と地形 ・集落と気候 ・家屋の構造 (2) 集落の成立と発展 ・集落の発生 ・条里集落と荘園集落 ・新田集落 (3) 村落の形態と機能 ・散村集落 ・集村集落 ・村落の機能 (4) 都市の形態と機能 ・自然発生都市と人為都市 ・都市の機能 ・生産都市 ・消費都市 ・交易都市 ・都市計画 (5) 田舎と都市の関係	■村落と都市(28頁) (1) 集落と民家 ・集落の種類と立地 ・民家の風土性 (2) 村落の形態 ・村落の形態 (3) 都市の発達と機能 ・都市化とその問題 ・都市の立地 ・都市の発達 ・都市の性格と機能 (4) 都市地域 ・都市地域の分化 ・都市群地域 (5) 都市の建設と育成 ・都市問題と都市計画 ・都市計画の事例	■村落と都市(10頁) (1) 生活の舞台となる集落の成り立ち ・集落の立地条件 ・集落の発達と文化 (2) 村落の特徴と生活様式 ・村落の形態と機能 ・村落共同体の形成 (3) 都市の機能と生活 ・都市の発達 ・世界の大都市の発達と分布 ・都市の機能 ・都市内部の機能の分化 (4) 世界と比べてみた日本の都市 ・大都市への一極集中 ※別途「都市・居住問題」に関する記述あり(14頁)
交通の発達と機能に関する説明	■交通、通信網(14頁) ※頁数は通信を除く (1) 陸上交通 ・道路(うち1.5頁) ・鉄道(うち3.5頁) ・自動車(うち1頁) (2) 水上交通 ・内陸水路(うち2.5頁) ・海上交通(うち2.5頁) (3) 航空路(うち2頁)	■交通の機能と生活(6頁) (1) 交通の機能 (2) 交通の特色 ・道路(うち1頁) ・自動車(うち1頁) ・鉄道(うち1頁) ・内陸水路、海上交通(うち1頁) ・航空交通(うち1頁)	■現代世界の交通網(3頁) ・航空交通網の地域差(うち1頁) ・航空交通網の発達(うち1頁) ・さまざまな交通機関(うち1頁) ＝海上交通、鉄道、道路 ※別途「新しい都市交通のあり方」に関する記述あり(1頁)
国家についての説明	■世界の国情(13頁) (1) 国の構成 「国という有機体において、国土と国民は統治を通じて一体化されているのである。」 「国はその国民をつくっていかうとする意欲と情熱をもっているものでなければならない。」 (2) 国土の形と面積 「国土としてまとまった統一あるものに組織されて行くには、国の力が問題となる。すなわち国の位置、形、大きさ、経済力、軍事力、その民族の文化的社会的な強さの総合されたものが国力である。」 (3) 国民 「国力を決定づけるものとして、国土の広さと共に、国民人口とその素質および国民の国家意識があげられる。」 (4) 国境の問題 ・国境の意義 ・自然的国境 ・人為的国境 (5) 領海・領空 (6) 世界の現情	■国家(5頁) (1) 国家の組織 (2) 国家と民族 (3) 国家の領域と国境 ・国家の領域 ・国境	■現代世界の国家(3頁) ・世界を構成する国家 ・国家と主権 ・国家が支配する領域 ・さまざまな国境 ※別途「民族・領土問題」に関する記述あり(15頁)

第二節 世界の国情

世界をみわたすと、住民の多くは大抵いずれかの国に属して生活している。めまぐるしく動いている世界の情勢は、これらの国々の間に生ずるいろいろの問題から、かもし出されているのである。国によっては大きい領土と膨大な資源を擁して、強い力をもっているものもあれば、小さく弱い力しかもたないものもあり、文化の進んでいる国もあれば、遅れている国もあり、その国境に満足している国もあれば、また不満をもつ国もあるというように、世界の国は決して一様ではない。そのためにいろいろめんどろな問題が国際関係を複雑にしている。

世界の住民と地理的環境との関係を調べていく場合、住民が属している国とその地理的環境との関係をみるのであれば、世界の実状を明らかにする上に十分とはいえない。

1. 国の構成

国は一つの「政治的な地域社会」であるといわれている。国をつくっているものは、国土、国民および主権の三要素であって、これが一つでも欠けていては、国として成り立たないものである。つまり国という有機体において、国土と国民は統治を通じて一体化されているのである。

国も人間と同じく、誕生し、成長し、老衰し、死滅するもので、ただ人間とちがって更生することができるといわれる。ポーランドは三度に亘り分割され、ついに1795年に崩壊したが、1815年に更生し、1831年に再び死滅し、1918年の第一次大戦後にまたも更生している。

このように、国はその国民をつくっていかうとする意欲と情熱をもっているものでなければならない。近頃の世界一般の考え方からすると、国をつくるにはその国民の意志が尊重されることになって来て、必ずしも経済的、文化的に独立するに十分でないものでも国となっているものが少なくないのである。

現在世界で国と呼ばれているものをみると、第二次大戦の結果、政治的地位のはっきりしないものもあるが、大体70有余国におよんでいる。しかし第二次大戦以前には世界の独立国は植民地および植民地的性質の地域をのぞいて64カ国であった。この他にカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インド、南阿連邦などのように独立国に近いイギリス自治領があった。第一次大戦以来、民族自治の考え方が強くなって、実力をもたない小国がたくさん生まれて来た。またひとりで独立国としての営みができなくなって、いくつかの国々が集まって集団国家群を形成していくという新しい考え方が一般的となって来た。つまり昔の国という性格が大分変化して、むしろ今日では、国は一つの集団国家群の一地方的なものになって来ている。とくにソヴィエト社会主義共和国連邦に属する国々などでは、その性格がよくあらわれている。

2. 国土の形と面積

国家としてまとまった統一あるものに組織されて行くには、国の力が問題となる。すなわち国の位置、形、大きさ、経済力、軍勢力、その民族の文化的社会的な強さの総合されたものが国力である。

各地域をまとめて一国としていくためにはその国の形、大きさが影響するが、最も大きい作用として距離が問題となる。それがためには、一国の首府が偏ることなく国の中央に位置していることが望ましく、たんに政治上の首府の位置というだけでなく経済的、文化的中心が国土の中心部にあることは、すべての点で好都合である。したがって国土が団塊状をなして、一つにまとまっている単節国は形としてよい国とされている。アメリカ合衆国、ソヴィエト連邦などは、単節国の最も代表的なものといえるのである。イベリア半島のスペインや、その北隣のフランスなどは比較的にまとまった形をとっている。首府マドリードやパリなどは国のほぼ中央の位置にある。細長い国や出入の多い国、飛地のある国は一般的に複節国といわれているが、これらの国は国力を十分發揮する上に、合理的な形とはいえない。わが国も島嶼という条件がなかったらよい形の国とはいえない。

ヨーロッパのチェコスロヴァキアなどは悪い形の国である。とくにスロヴァキア、カルパト・ウクライナ地方は狭長であったが、第二次大戦の結果、この狭長な部分がソヴィエト連邦に割譲されて比較的団塊状になってきた。南アメリカのチリは、世界の最長国といわれ、その幅は340キロで、長さは南緯17° 30' から、56° に亘る4186キロとなっている。もしこの国がヨーロッパにあったならば、おそらくこの形のままで存続しなかったであろう。アンデス山中の生活は、かつてのインカ帝国の場合にみるように、南北に長い形がとりやすかった。こうした形からすれば、これらの国は生活を営むためにもどうしても距離を克服する交通機関の完備が重要な条件となってくるのである。

国の大きさについて見ると、広大な面積をもっている国は資源にも富み、その種類も多く、また生産人口も数多いことにもなり、広大な国土をもつことはとくに近代国家の発展には必須な条件である。アメリカ合衆国とソヴィエト連邦は、共に広大な国土をもち、世界の指導的地位にある。アメリカ合衆国はアラスカ、ハワイなどをのぞいて、本土の面積は771万平方キロであるが、ソヴィエト連邦は2227万平方キロもある。また人口については、アメリカ合衆国本土の1億5775万人に対してソヴィエト連邦は1億9438万人を数えている。この他に本国と属領を加えて1000万平方キロを超える国としては、イギリス連邦諸国の3333万6900平方キロ、フランスの1203万平方キロ、中国の999万平方キロでこれらはいずれも広大な国土をもち、世界的強力な国となっている。わが国は第二次大戦の結果、戦前の面積の約54.5%、人口の約68.8%に縮小し、36万9000平方キロで、ちょうどヨーロッパにおける全ドイツ、(35万3000平方キロ) ポーランド (31万平方キロ)、ノルウェー (38万平方キロ)、スウェーデン (44万平方キロ) の諸国に匹敵する大きさとなった。

3. 国民

国力を決定づけるものとして、国土の広さと共に、国民人口とその素質および国民の国家意識があげられる。そこで国力の結集には、文化的に単一民族であり、多数の国民が国家構成に一致団結することが最も望ましいのである。このような民族構成の国を単族国というのである。第二次大戦後のわが国はこのよい例である。第一次大戦後民族自決主義のもとに多くの後進民族の国々が生まれたが、その多くは単族国であった。ソ連圏内の共和国、自治共和国、自治州などの構成は、みな民族単位となっている。しかし同一民族でも必ずしも同一の国を構成するとは限らず、別々の国に分かれている場合が少なくない。

スイス国民の大部分はドイツ人であり、国の大部分はドイツ語で話すのであるが、人民のすべてがスイス国に忠誠を感じている。その点同じドイツ人からなっているオーストリアとドイツとの関係とは大分違っている。オーストリアは第一次大戦の結果、ほとんどドイツ人だけの国となり、現に1938-1945年にかけてドイツに併合されたこともあったが、第二次大戦の結果、ふたたび独立国となったのである。しかもその国民の70%までがドイツ人といわれている。二つの民族が一緒になって一つの国をつくっている例としては、ベルギーがあげられる。

また同じ民族の一部が他国に編入所属されたりすると、その尺度は新しい国の国民たることを喜ばず、またその国からも平等の扱いをうけない場合が多い。このような民族を小民族と呼んでいる。ことにヨーロッパのような国境変動の多いところでは、このような少数民族問題が起っている。ドイツ民族のように重なる敗戦をうけた国においてよくみられる。

ヨーロッパにイレデンタ (Irredenta) という言葉があるが、これは母国を離れた少数民族が他国において母国復帰を熱望して、民族的統合をうたてようとする運動を意味している。第二次大戦後のヨーロッパにおいては、必ずしも民族の意志どおりに国境が制定されていたとはいえないので、将来に問題が残されている。

2-2 日本史B

「地理B」と同様に、現行の平成18年検定済教科書「詳説日本史 改訂版」、昭和55年検定済教科書「詳説日本史 再訂版」、及び昭和31年検定済教科書「四訂 日本史」（いずれも山川出版社）を対象として、「日本史」が『国土教育』に果たしている（果たしてきた）役割について比較・検証した。

結果、過去の教科書に比して現行の教科書は、①全面カラー化されビジュアルになった、②「歴史の追究」というテーマ学習項目を設けて、日本と諸外国との関係に目を向けたテーマ「世界の中の日本」や民俗学的な部分に踏み込んだテーマ「日本人の生活と信仰」を取り上げるようになった、という特徴を持つものの、「日本史B」という科目が教える内容は、半世紀の間、依然として原始・古代以降のわが国の事件史・出来事史であることには変わりはないことがわかった。

以下では、こうした「日本史B」の教科書に、『国土教育』的視点から、新たな風を吹き込むための2つのアプローチを提案したい。

一つは、外国人の目から見た日本（日本人）の評価を組み込むこと。しかも、利害関係や感情論から対立構造になりがちな歴史上の出来事・事件を対象とするのではなく、その時々日本社会や日本文化、日本人の姿を対象とするのがよい。日本人の視線から見た日本史ばかりをつくってはいは、日本（日本人）の特徴の本質的な部分、市井の人々が生活している（していた）普通の日本人の歴史は見えてこないし、また、日本社会や日本文化の研究として妥当であるかどうかといったアプローチしか認めないといわれると、思考が止まってしまう。

どの時代にあっても、日本人にとって普通の出来事は、普通であるが故に語られることはないし、歴史に記録されることもない。逆に、日常発生することのない特殊な事件や出来事は、特殊であるが故に、珍しいイベントであるが故に、重要なこととして記録され、結果、歴史上の重要事項としてクローズアップされることになる。

歴史家の渡辺京二氏は、著書「逝きし世の面影」において、幕末・維新の時代に訪れた外国人によるさまざまな手記、記録を細大漏らさず調べ上げ、それらを丹念に読み解いて、当時の日本人の姿を鮮やかに描き出している。文明度からすれば、当時の日本は西欧諸国より数段遅れていたが、その生活習慣や人情風俗は、彼ら外国人を驚倒させ

るのに十分だった。江戸庶民が貧しくとも卑屈にならず、幸福で満足した生活を送っていること、異国人に対して親切さともてなしのよさを持ち合わせていること、物や自然に対する畏敬の念を失っていないこと、そうした日本人の美点の数々が、異国からの訪問者の手で、大きな驚きとともに記録されている。本書を読めば、幕末から明治を生きた日本人が、今ではほとんど失われてしまった美徳を、いかに自然に身につけていたか、ありありと知ることができる。

更に、安政6年に初代駐日イギリス大使として着任したラザフォード・オールコックが、随所で日本の景観の美しさに心底驚き、たとえば小田原から箱根に至る道路の「比類のない美しさ」にさえ目を奪われた事実や、「日本の農業は完璧に近い。自分の農地を整然と保つことにかけては、世界中で日本の農民にかなうものはない」と田園と日本農業のありかたに唸ったこと、そして、オールコックがライバル視したタウンゼント・ハリスもまた「私はこれまで、このような立派な稲、このような良質な米を見たことがない」と日本の水田の見事さに驚いていたという事実などは、直接『国土教育』の材料として活用したくなる興味深い内容である。

私の提案の今一つは、文字として残っていない歴史「無字の歴史」「口伝の歴史」から学ぶことである。

民俗学者の宮本常一氏は、日本全国をくまなく歩き、各地の民間口伝を克明に調査した結果を彼の代表的著書「忘れられた日本人」にとりまとめているが、そこでは、辺境の地で、文化を築き支えてきた伝承者＝老人達がどのような環境に生きてきたかを、古老たち自身の語るライフヒストリーをまじえて生き生きと描かれている。

前段でも述べたが、記録に残されてきた著名な人物や華やかな事件・出来事だけが日本史なのではなく、辺境な地に住む市井の人々の普通の暮らしにも聞くべき歴史がある、いや、こうした市井の人々の暮らしこそが日本人の真の歴史ではないか。

本文中、対馬における「寄りあい」の場面が出てくるが、村で取り決めをおこなう場合には、みんなの納得のいくまで何日でも話し合う、多数決で決めるような乱暴なことをしない、それが当たり前のルールだったそうだ。これこそが、本来の日本人の文化であつたのではなからうか。

2-3 世界史B

「地理B」及び「日本史B」と同様に、現行の平成18年検定済教科書「詳説世界史 改訂版」、昭和54年検定済教科書「詳説世界史 再訂版」、及び昭和31年検定済教科書「世界史」（いずれも山川出版社）を対象として、「世界史」が『国土教育』に果たしている（果たしてきた）役割について比較・検証した。

結果、過去の教科書に比して現行の教科書では、①全面カラー化されビジュアルになった、②「日本史を含めた世界史である」ということを意識して記述されるようになった、③近代史のウエイトが多少上がり、西欧史のウエイトが多少下がった、という変化は認められるものの、「世界史B」という科目が教える内容は、半世紀の間、依然として「ヨーロッパ中心史観にもとづく事件史・出来事史」であることにはかわりはない。

従って、「日本史B」同様、国土形成の歴史や国土整備の効果、国土整備に携わってきた人々の苦労などの『国土教育』を学ぶ材料として、現行の「世界史B」に効果的な役割を期待することは難しいといわざるを得ない。

なお、こうした高等学校世界史教育に対し、時代遅れだとして抗い、自らの考えを提案している教育者も存在しないわけではない。謝世輝氏（理学博士）は、20年以上も前から、ヨーロッパ偏重である世界史を見直し、「ヨーロッパ史はユーラシア史のなかの一部分にしかすぎない。」、あるべき世界史像は「メソポタミアとエジプト中心の時代（約2000年）→アリア人（漢民族）の時代（約2000年）→騎馬民族とイスラームの時代（1000年余り）→西洋の時代（1760年頃から今日までわずかに2000年余り）」とする新しい世界史観を提示している。

『国土教育』的視点からみた「世界史B」の改善の方向性（私論）については、次の章で改めて展開することとしたい。

3 高等学校地理歴史科教育が抱える課題と今後の展

3-1 高等学校地理教育が抱える課題

これまでのところで、高等学校教育において『国土教育』を再構築していこうとする場合、地理教育の果たす役割が極めて大きいことが検証された訳だが、実はこの高等学校地理教育そのものが形骸化しつつある。そもそも、高

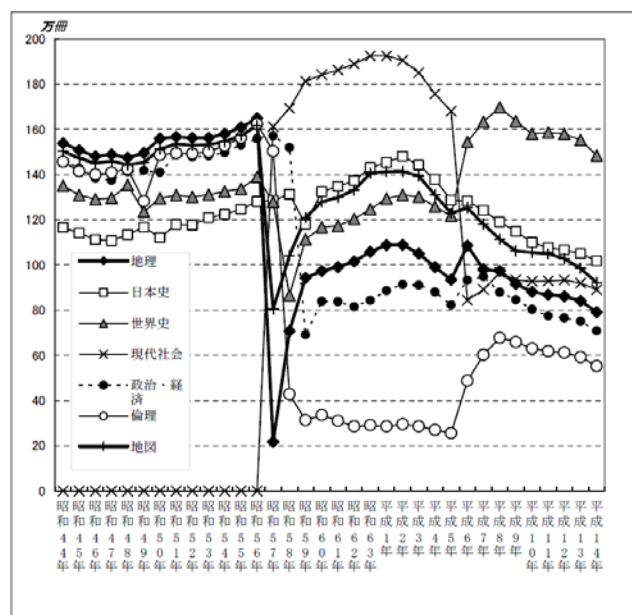
校生の約半数は学校で地理を履修していないのである。以下に高等学校地理教育が抱える課題を示す。

(1) 学習指導要領（世界史のみ必修）の影響

高等学校の社会科で「地理」の履修者が大幅に減ったのは、昭和53年の学習指導要領改訂で「現代社会」（必修）が新設された時からである。この指導要領が完全施行された昭和57年度以降、それまで高等学校1学年という定位置を確保していた「地理」は、そのポジションを「現代社会」に譲り、2学年や3学年で履修することとなった。さらに、平成元年の改訂で、高等学校社会科が地理歴史科と公民科に分けられ、地理歴史科は「世界史を含めて2科目4単位以上」が必修とされた。要するに、「世界史」のみが必修となったのであり、それ以降、「地理」履修者が全生徒の半数以下という状況が続いている。

地理歴史科において「世界史」のみが必修とされ、「地理」と「日本史」のいずれかを選択する現行の枠組みは新指導要領においても継続される。「地理」と「日本史」の扱いは指導要領上は同等であるが、「地理」で受験できる私立大学の文系学部が限定されるため、多くの高校で文系進学を希望する生徒は「日本史」を選択しているし、学校によっては選択したくとも「地理」は開講されていないという状況すら生じている。さらに、「世界史」が必修であるなら「日本史」も必修化すべきとする具体的動き（横浜市教育委員会、神奈川県教育委員会、東京都教育委員会）さえあり、「地理」を学習する環境は、益々厳しくなっている。

さまざまな事象を正しく認識するには、空間的視野と時間的視野の中に当該事象を位置づけて捉えることが不可欠であるが、「地理」を重要視しない現在の学習指導要領の枠組みのままでは、空間的思考力を身に付けさせる教育が十分行われることのない状況が続くことになる。



図－7 高等学校社会科・科目別教科書需要数の推移²²⁾

(2)大学入学試験の影響

大学全入時代を迎えた近年の傾向として、経営上の観点から、入試科目を1～2科目程度とする大学が増加している。大学受験そのものが、高等学校の学習の目的となつてしまいがちであるという現状と照らし合せて考えると、この入試科目の最小化は、「地理」のみの問題ではなく、大学生の基礎学力の低下につながる極めて重大な問題であることがわかる。

大学受験時の地理歴史科目の選択について具体的にみていくと、私立文系志望者については、「地理」では受験できない大学・学部が多いため、大学受験科目としては「日本史」または「世界史」を選択する人が圧倒的に多い。難関私立大学の経済系学部には、地理歴史科を1科目も選択せず、「数学」を選択する入試方式の定員枠の方が多い大学もある。

一方、国立文系志望者についてみても、いわゆる国立最難関校の受験（第二次試験）では、地理歴史科から2科目が課されるが、こうした（地理歴史科から2科目を課す）大学・学部は全国的に見ても極めて限定的で、結果、2科目目としての「地理」を選択する生徒も減少している。

文系の学生が多く就く職業、特に行政やマスコミなど社会に直接与える影響が大きい分野で働くこととなる将来世代のほとんどが、地理的な見方・考え方が出来ない、自然地理的・人文地理的な教養を持ち合わせていない、空間

的思考力に欠けているといった事態、こうした状況をこのまま放置しておいてよいものであろうか？

なお、大学入試センター試験の受験者数をみると、平成22年度の地理歴史科の受験生364,056人の選択は、「日本史」155,886人（42.8%）、「地理」115,073人（31.6%）、「世界史」93,097人（25.6%）となっているが（この傾向はこの10年間変わらない）、文系志望者が「日本史」又は「世界史」を選択しているということを考え合わせると、高等学校での「地理」履修者の多くは理系の生徒であり、しかもセンター試験対策としての色が濃いことがうかがい知れる。実際の高等学校の履修プログラムを見ても、理系コースは「地理」を選択、文系コースは「日本史」を選択、と明確に区分している学校が少なくない。

(3)中学校社会科の履修内容の減少による影響

平成14年度施行の学習指導要領から、中学校社会科の世界に関する学習時間・学習内容が、地理的分野・歴史的分野ともに大きく減少したことの影響も大きい。「地理（世界地理）」に関してみると、指導要領では近隣の国を含めて2つ又は3つの国を事例として選んで学ぶこととされたため、授業で扱わなかった地域や国に関する知識が不十分であることはもちろんのこと、興味・関心すら持たない生徒が増えているそうである。授業で扱うのは中国（または東南アジアの一国）、アメリカ合衆国、EUの一国、という中学校が大部分で、アフリカやラテンアメリカなどはほとんど生徒の視野に入っていない。視野に入らないものに興味の持ちようがないともいえよう。（これは「世界史」も同様か、「地理」以上に深刻であり、未履修問題や「世界史」必修にも関わらず、地歴3科目の中で「世界史」のセンター試験受験者数が最も少ないという事態を生じさせている。）

なお、平成24年度から全面实施される中学校の新学習指導要領では、世界地誌の学習時間・内容が大幅に改善されることとなっているので、数年後に高等学校に入学してくる生徒たちがどのように変化しているか期待して待ちたい。

(4)教員養成上の問題

こうした状況を背景として、高等学校における「地理」

の開講率および選択者数は減少し、結果、地理学科卒業生の教員採用にも大きな影響が及んできているという。更に、「地理」を専門とする教員が減少すると、「歴史」や他の専門分野の教員が「地理」を担当する機会が増えることになるが、高校でも「地理」を履修せず、大学でも専門として「地理」を学んでいない教員が、「地理」の面白さを授業で伝えることは容易ではなく、高等学校の地理教育を取り巻く状況は一層厳しさを増しているといえよう。

3-2 地理教育復権に向けた取り組みと今後の展望

高等学校地理教育が抱える上記課題を憂い、日本学術会議／地域研究委員会／人文・経済地理と地域教育（地理教育を含む）分科会（委員長：碓井照子奈良大学文学部教授）及び人類学分科会（委員長：山本眞鳥法政大学経済学部教授）は、平成19年9月20日に「対外報告 現代的課題を切り拓く地理教育」を提言し、地理教育の復権に向けて、関係機関への働きかけを継続している。とりわけ、「国や地域の多様性、文化の多様性を尊重して公平な意思決定の出来る人間の育成を図ることは、学校教育における地理教育の目的の一つである」とする、つまり「地理＝多様性」であることを基本認識としている地理教育のスタンスに共感を覚える。まさに「国土＝多様性」である。

以下では、これまでに整理してきた高等学校地理歴史科教育を巡る現状と課題を踏まえ、『国土教育』を充実していく上で必要と考えられる方策について、若干の私論を展開したい。

(1) 大学入試改革と高等学校地理歴史科教育の再編

大学受験が高等学校の学習の目的となってしまう、受験科目以外の学習がおろそかになりがちであるということ、及び大学全入時代を迎え、経営上の観点から入試科目を最小化する大学・学部が増加していることは既に述べたが、この危機的状態を改善しない限り、高等学校地理歴史科教育の未来はないと考える。

私立文系志望者の大多数が大学受験で「地理」を選択しておらず（選択することができず）、最難関私立大学の経済系学部では、英＋数（＋国or小論文）のみで受験し、地理歴史科を1科目も勉強することなく入学できてしまう大学も少なくない（むしろそれが主流となってしまう）。

国立文系志望者についてみても同様で、地理歴史科か

ら2科目を課す大学・学部は全国的に見ても極めて限定的であるため、2科目目としての「地理」を選択する生徒もほとんどいないのが現状である。

一方、高等学校での「地理」履修者の多くは理系の生徒であるが、センター試験対策として地理歴史科目を選択する必要のない私立理系志望者は、当然ではあるが真剣な眼差しで「地理」を学ぶことはないのである。

「数学」と「物理」、「化学」に追われて、地理歴史にまでとても手のまわらない理系の学生、受験科目が地理歴史から1科目ないし不要であるため、空間軸と時間軸の双方から物事を見極めることに気づき、学ぶことのできない（をしない）文系の学生。いずれにせよ、この国を背負って立つべき未来ある若者が誰も総合的に地理歴史を学んでいないという現実、この国の将来を間違いなく危うくしている。

彼我の違いを理解しないまま欧米の制度を転写してしまふ法律家、経済活動は国土と国土への働きかけから生まれるという繋がりを認識できない経済学者、「地理」を真剣に学ぶことなく高校・大学を卒業して地理教育に携わる教師、国土の自然条件の違いや国土形成の歴史の違いを理解できないで世論をミスリードするマスコミ、直面する課題に対峙する際、歴史的な視野（時間軸）と世界的な視野（空間軸）で考え、過去から学び、そして他との比較を通して切々と国民に語るることのできない技術者など、地理教育の欠如がこれらの「貧しい日本人」の形成に、全く関係無いとは言いきれないのではないのか。

従って、まずは大学受験に必要となる地理歴史科の科目数を増やすべきであると提案する。そもそも理系学部では通常、英＋数＋理科2科目（「物理」、「化学」、「生物」等から選択）が必須の試験科目となっている。国立であれ私立であれ、専門基礎となる理科については「物理Ⅰ（3）、同Ⅱ（3）、化学Ⅰ（3）、同Ⅱ（3）＝12単位」の習得が大学入試の必須条件なのである。国立医学部ではセンター試験において理科3科目必修という大学すらある。これに比べ、文系学部では、専門基礎であるはずの社会について「日本史B（4）、世界史B（4）、地理B（4）のうち1科目選択（＝4単位）」というのが大学入試の相場なのである。このような状況でよいはずがない。

まずは、少なくとも現行学習指導要領（「世界史」必修、「日本史」か「地理」選択必修）に基づき高等学校で履修する科目については、文系学部の入試科目の必修要件

として位置付けたい。また、センター試験も同様に、高等学校で履修した科目（科目数）は必須としたい。学んだことはきっちり身についたかどうか確認する、そのような当たり前の制度設計にすれば、高等学校の地理歴史科教育も、大学受験のための地理歴史教育も活きてくるのではないかな。

そして、さらに出来れば、理系は「地理」、文系は「日本史」という画一的な教育システムとなってしまうやう、多様性のある日本人が育てられるやう、「地理」、「世界史」、「日本史」の全て（3科目）を必修とするやうな学習指導要領に改善していきたい。「地理」も歴史（「世界史」、「日本史」）も基礎的教養として身につけた社会人を送り出せるやう、高等学校の地理歴史科教育を改善したい。かつて（昭和38年度～昭和47年度の10年間）は、「倫理・社会」と「政治・経済」（いずれも必修）とは別に、「地理」、「世界史」、「日本史」という3つの地理歴史科目が全て必修化されていたのである。

(2) 地理歴史科教育全体の底上げ

大学受験を念頭に置いた高等学校地理歴史科教育と両立させることは容易ではないが、暗記科目としての地理歴史科から脱却し、歴史的な視野（時間軸）と世界的な視野（空間軸）を持って「現在を如何に生きるか」を考えることの出来る「日本人」育成のための教育科目としたい。

フランスでは、地理と歴史はセットになった1つの科目であり、日本の中学・高校にあたるコレッジ（11～15歳）とリセ（15～18歳）の7年間毎年必修で学習する。また、わが国の高等学校にあたるリセの教育課程では、わが国同様、文系、理系、職業系といったコース制をとっているが、いずれのコースを選択しても、「地理・歴史」は必修科目とされている。なお、歴史については、自国史教育と合わせて外国史教育も行うというスタイルである。

一方、イギリス（イングランド）では、「地理」と「歴史」が独立教科として社会科教育を担っており、義務教育期間である5歳から16歳までの間、14歳まで「地理」と「歴史」は必修教科、15～16歳の期間はいずれも選択教科になっているが、5歳から14歳までの間は市民科（わが国の公民科に相当）の授業はなく、社会科教育は「地理」と「歴史」に専念できるカリキュラムとなっている。また、義務教育修了資格として一般にみなされるのは学校の卒業ではなく、学校外の試験機関が実施するGCSE（中等教育修了一般資格）試験での各教科の成績で

あり、どの教科でどの位の成績を取ったのかが学歴として重視される。生徒は、進路に応じて数科目を受験するが、「地理」は多くの受験者を集める人気教科であるらしい。ちなみに、「歴史」はフランス同様、自国史教育と合わせて外国史教育も行うというスタイルとなっている。

さらに、これは両国に共通して言えることであるが、地理教育の学習内容は、世界の国々や地図への関心といった情緒的なものではなく、空間から政治・経済・社会を見る冷静なまなざしを育て、現在を生きてゆく術を学び取るものであるという位置付けにある。

フランスの地理学は、伝統的に、人間がどのように主体的に環境を利用してきたかということに関心を持ってきた。このような考え方から、リセの教科書（1年生）では自然地理と人文地理の内容が別々に出てくることはなく、コレッジで学習した個別の内容が統合されたテーマ（食糧問題、水資源、都市環境など）が章ごとに提供されている。また、この全体的な学習の後、2年生ではヨーロッパ域内のつながりとフランスの位置について、3年生ではグローバル化について総合的な判断を促す学習がなされている。

イギリス（イングランド）の地理教育でも重視されているのは、自然・人間・社会・空間の観点から場所について探究する能力の育成、および探究の結果として身につけられる概念的な知識・理解および意思決定を含む幅広い技能であり、事実に・網羅的な地誌的知識ではないようである。

日本では、「地理」も「世界史」も意欲的に学習しようとする生徒が減る傾向にあるが、地理歴史科が中等教育（中学校～高等学校の6年間）全体の中で持つ役割についてももう一度議論し、抜本的な改革に着手しなければならないと考える。平成20年1月の中央教育審議会答申にある「地理歴史に関する総合的な科目の設置」もその選択肢の一つであろうし、また、フランスやイギリスの教育内容や教育システムに学ぶべきことも少なくない。

(3) 高質な教育者の育成と幅広い実践

「世界史」の必修化とあいまって高等学校での「地理」履修者が減少した結果、「地理」を専門とする教員の採用がほとんどない時代がずっと続いてきている。一方で、「地理」も「歴史」も必修であった時代に採用された教員が2007年以降大量に退職しつつあり、このままでは近

い将来、地理的な見方や考え方を教えることができる教員がいなくなってしまうことは避けられない状況にある。従って、これを回避するため、採用する側（教育委員会）と育成する側（大学）が連携して、真の地理教育『国土教育』を実践できる教員を養成していかなければならない。

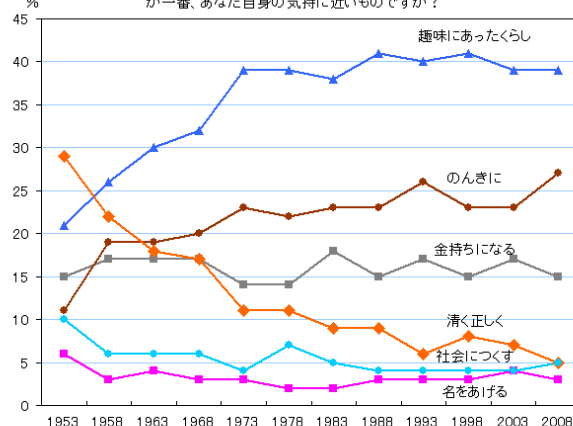
一方、教育を受ける側（ターゲット）は、当然のことながら、初等・中等教育を受ける生徒（小学生、中学生及び高校生）ということになるが、子供たちだけではなく、社会全体として地理歴史教育、『国土教育』の重要性を認識していただくための継続的な運動を起こしていかなければならない。

その際、ターゲットとしてまず考えるのは、初等・中等教育を受けている子供たちの父親・母親世代といったことになるが、これまで述べてきたように、十分な教育を受けず、今の生活に妙に満足するか、或は日々の生活にあくせくし、また、場合によっては自分の子供の教育を学校に押しつけようとする父親・母親世代をターゲットに考えるのではなく、むしろ、比較的優れた地理歴史教育を受け、戦後といった厳しくハングリーな環境に育ち、第一番目の人生を全うし、余力を残して、そして大きな大きな人生経験を得てきた、多くの先輩方（高齢者）に新たなチャレンジをしていただく、ここに訴えかけ、社会全体の地理歴史教育活動に積極的に参加していただくよう活動展開していくべきではないか。

「孫の世代、曾孫の世代のために」と考えてくれる先輩方、若い頃、純粋な心を持って国土再建に取り組んでこられた先輩方、そして高齢化が進む自由民主主義国家において、今後ますます政治的発言力が増す先輩方の、知識と経験を活かしていただかない訳にはいかない。

なお、これと並行して、子供たちそして年輩の方々に、本当の地理歴史教育『国土教育』を実践できる「教員以外の人材」を幅広く育成していかなければならないが、その際、大学・大学院で土木工学を学び、社会に出て国土整備・国土管理に携わる者は真っ先に、その責務を果たさなければならぬのである。

人のくらし方には、いろいろあるでしょうが、つぎにあげるもののうちで、どれが一番、あなた自身の気持ちに近いものですか？



(注) 比率の多い順にそれぞれの選択肢は以下の通り。「金や名誉を考えずに、自分の趣味にあつた暮らしをすること」、「その日その日を、のんきにクヨクヨしないでくらすこと」、「一生けんめい働き、金持ちになること」、「世の中の正しくないことを押しのけて、どこまでも清く正しくくらすこと」、「自分の一身のことを考えずに、社会のためにすべてを捧げてくらすこと」、「まじめに勉強して、名をあげる」こと

(資料) 統計数理研究所「日本人の国民性調査」

図－8 くらし方態度の長期推移（日本人の国民性調査）

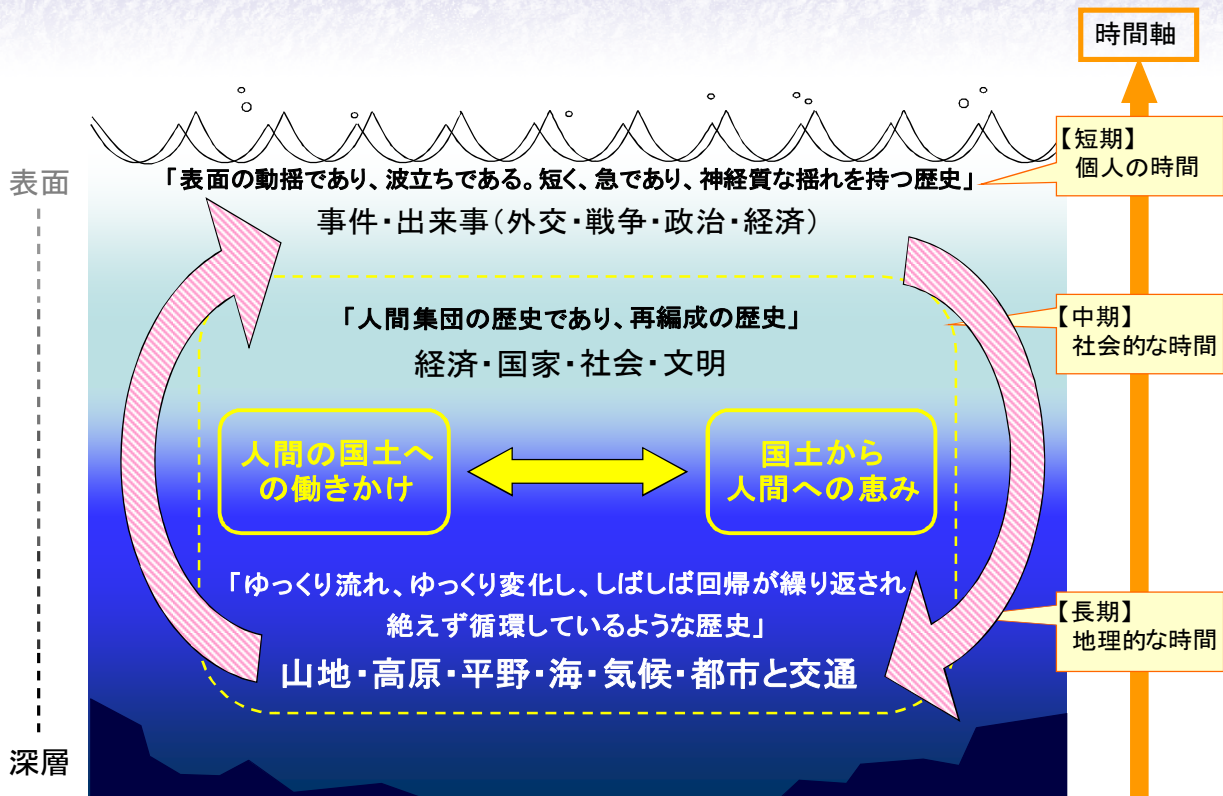
歴史の深層としての「国土」

1 「地中海」に見るF・ブローデルの歴史思想

フランスの歴史学者、フェルナン・ブローデル (Fernand Braudel, 1902年 - 1985年) が、16世紀のスペイン帝国とオスマン・トルコ帝国が覇権を争っていた時代の地中海を登場人物として、過去に類を見ない野心的な歴史書「地中海」（正式には「フェリーペⅡ世時代の地中海と地中海世界」）を著してから既に半世紀以上の年月がたっているが、人類は彼の偉大な遺産を生かし切れているであろうか。（という私自身、「地中海」制覇に対する今回の挑戦も、あえなく失敗に終わっているのだが。）

「地中海」では、空間（地理的条件や自然環境）が歴史において果たす役割に焦点が当てられるとともに、歴史（時間軸）が段階的に成層化された三つの次元、つまりは「地理的な時間（長期）」、「社会的な時間（中期）」及び「個人の時間（短期）」に区別され、大きな、生きた、そして全体の歴史が三部構成で展開されている。

第Ⅰ部では、「ほとんど動かない歴史」、「人間を取り囲む環境と人間との関係の歴史」、「ゆっくりと流れ、ゆっくりと変化し、しばしば回帰が繰り返され、絶えず循環しているような歴史」が取り上げられている。これは



図－9 歴史の深層としての「国土」(F・Braudel『地中海』の内容を参考に筆者作成)

「長期持続の歴史」や「深層の歴史」という言葉でも表現されているが、その真相は「歴史地理学」の試みである。山地の話であり、そこに住む人々の暮らしであり、平野の変化や土地改良の話であり、水の問題である。また海の暮らし、気候の変化、それに伴う農作物の収穫、パンの値段の話、あるいは交通路としての陸路や海路、航海の仕方、都市の機能など、人間と人間を取り囲む環境との関係がここでは詳細に調べ尽くされている。

次に、第Ⅱ部では、この動かない歴史の上に姿を現す「緩慢なリズムを持つ歴史」、「さまざまな人間集団の歴史であり、再編成の歴史」が取り上げられる。そこで語られるのは、経済（時間距離の障壁、人口動態、貴金属の流入と物価上昇、地中海産小麦の均衡と危機など）であり、国家（オスマン・トルコ帝国とスペイン帝国の起源、官僚制度、地方自治、財政難など）であり、社会（領主、農民、ブルジョワ階級の変化、窮乏と強盗行為など）であり、文明（キリスト教世界とイスラム教世界、ユダヤ人の運命など）であり、戦争の諸形態（戦争と技術、国家、文明との関係など）である。

そして最後の第Ⅲ部に至ってようやく、「伝統的な歴史」、「出来事の歴史」が登場する。具体的には、レパントの海戦（1571年）をはじめとする戦争の歴史、外交

の歴史が語られるのであり、ブローデルはこの階層の歴史のことを「深層の歴史」に対して、「表面の動揺であり、波立ちである。短く、急であり、神経質な揺れを持つ歴史である」と説明している。

ブローデルは決して第Ⅲ部で語る事件史、出来事史をおろそかにしていた訳ではないのだが（実際、第Ⅲ部の分量は、浜名優美翻訳「地中海」全5冊中2冊に及ぶ）、第Ⅰ部において、人間を取り巻く地理的環境という「空間」の問題を、長期の「時間」のなかに統合した点にブローデルの独創性があるといえる。彼は、地理（＝自然）の基礎をなす多種多様な要素が、人間に加えるさまざまな強制力や圧力を複合的な理論に要約することによって、「歴史地理学」の基礎概念をつくりあげた。

山地の圧倒的な（自然の障害としての）存在と山岳民が不可避免に取るきわめて独特の暮らし方や、四季の変化が戦争と平和のリズムや力学そのものにもたらす影響、地中海に統一性をもたらす交通路の必然性とその交点としての都市（人とモノと情報の交換・集積の場）の存在、そして交通路と都市によって規定される経済など、こうした様々な事象を膨大な数の論文、報告書、書物、出版物等を駆使しながら、ブローデルは「地理環境」が人間の歴史プロセスに対して「いかに決定的な影響を及ぼすか」という

問題に綿密な解釈を施し、地中海世界の地理的（＝自然的）な基礎と、この空間に生きる人間のために築きあげられた地中海文明の諸形態との間に、有機的な関連が実際にあることを明らかにして見せたのである。

2 「歴史地理学」と「国土」の概念

比較文化学者の入江隆則氏は、「歴史書とは歴史上めったに起こらないことを集めて書いた本のことだ」との記述の後、「ロシア革命であれ、明治維新であれ、コロンブスのアメリカ発見であれ、歴史的イベントと称するものは大事件であればあるほどめったに起こらないことであって、それによって常に起こっている日常性が隠されてしまったのでは、真の歴史とは云えまい。ブローデルが三つの時間の水準を考えたのは、歴史の名によって歴史を歴史でなくすることを避けようとしたからではないだろうか。」とブローデルの意図を読み解いている。

ブローデル自身、「集団から孤立した個人、また出来事が問題になるとき、歴史学はまさに「小さくて貧しい推測の科学」に他なりません。しかし、「集団と出来事の反復」を問題にすると、歴史学は、そのアプローチにおいても、その結果においても、はるかに推測の少ない、はるかに合理的な学問になるのです。深い歴史学、しっかりとした基礎になりうる歴史学とは、社会史なのです。歴史の動き全体、あるいは歴史の一領域全体を一人の例外的な人物に集約させようとするのはある種の濫用です。歴史の基盤と社会的事実を吟味すればはるかに単純で、はるかに明快であるはずの歴史を、個人に中心化されているがゆえにふらふらとした歴史で置き換えてしまっているのです。」と述べている。

つまり、歴史学というものは、自然環境を人間の尺度（人間集団の尺度、人間社会の尺度）で見つめ直すことそのものであり、それこそが真の歴史学「歴史地理学」であるとする、それがブローデルの歴史に対する認識である。

従って、ブローデルは、「人間は近視眼的であって、その物差しも短く、環境による変化をしかとは測れません。しかし、歴史地理学とはまた、空間と格闘する人間の歴史、努力と苦難に満ちた闘争の、また忍従の歴史、そして繰り返される労働の果てに人間が空間に対して収める勝利の歴史なのです。つまり、歴史地理学の研究とは、自然から人間へ、人間から自然へという二重の関係を常に孕んだもの

なのです。そこでは、常時混じり合い、絡み合い、際限なく繰り返される作用と反作用のさまが考究されるはずで。」と語り、更に「交通」や「農業」や「都市」を取り上げ、「要するにこうした人間と距離との格闘は、人間の歴史における大規模かつ重要なドラマの一つなのです。そして今日、このドラマはまだ終わってはいません。」「それ（距離）以外の面での一田畑や、森や、家畜や、町や、家を確保するための一人間の格闘の歴史を見なければなりません。（中略）田園とは、人間の、人間の道具の、人間の苦勞の、そして人間の共同体の創造なのです。」とその想いを熱く語るのである。

ここに至り、私は、この「歴史地理学」こそが『国土教育』の骨格であるということを確認するに至ったのである。歴史の目で見るとこそ、ブローデルのいう「自然環境」（筆者のいう「国土」）と人間の関係が、一歩引いた目線から俯瞰的に見えるのだ。例えば、人間と距離との戦いが「交通」であることは、現在の目線からのみでは、明確に読み取ることはできない。現在の目線からは、地理、民族、経済、法律、社会、技術、土木といったものそれぞれが分割され、ばらばらにしか見えない。だからこそ、如何に「国土」が人間にとって重要で、「国土」への働きかけと「国土」からの恵みの相互作用によって人間の生活が保たれているか、人類の幸せが担保されているかということとをわれわれは深く認識しなければならないのである。

『国土教育』と歴史（世界史）を繋ごうとする私の野心はここにある。高等学校の世界史教育（広く捉えれば、わが国の初等・中等地理歴史科教育全体）に携わる方々には、このような「国土」と人間の関係に関する深い認識を持って子供たちに対峙し、彼等が現在であり将来を一生懸命生き抜く術について、気付きと学びを与えていただきたいのである。自分は歴史の最先端に立っていて、その自分が未来を切り開いていかなければならないということ、覚悟をもって前を向いて生きていかなければならないということ、そして、歴史の深層には「国土」というものがある、これを絶え間無く改善していかなければ、歴史の表面にある経済的出来事や政治的出来事を本質的に変えていくことは出来ないのだということを教えていただきたいのである。

そのためには、歴史家は、歴史家である上に、地理学者、民俗学者、統計学者、経済学者、法学者、社会学者でなければならないのであり、それにも増して、われわれ

3 高等学校世界史教科書を比較する

「国土」に直接的に影響を与える者（大学・大学院で土木工学を学び、社会に出て国土整備・国土管理に携わる者）は、技術的素養だけでなく、この歴史地理学的素養を涵養しなければならない。

「歴史地理学」についてブローデルは、「地理学は、人間の生を織り成すあまたの糸の絡み合いに、驚くべき光を投げかけてくれる学問です。過去を巡る研究も、現在の問題を考える学問も、われわれが歴史地理学と呼ぶ研究領域が自身の基盤に存在していることを見出すでしょう。歴史地理学という名称は拙劣かもしれませんが、これは見る目のある者にとっては、厳密にして確固たる、明解な基盤的学なのです。多くの歴史家のように、また多くの社会学者や、現代情勢の専門家のように、地理歴史学をおろそかにしてはなりません。彼らの誤りとその必然的な帰結はもうお分かりでしょう。歴史地理学なしでは、全体像は欠落し、問題設定を誤り、偽りの現実を提示し、政治的な愚昧に辿り着いてしまうのです。繰り返して言っておきます。われわれの運命は常に地球に結ばれています。この基盤の歴史がいかに緩慢なものであろうと、それは間違いなく生の歴史であり、生の現実なのです。」と語っている。まさに正鵠を射た重みのある言葉である。

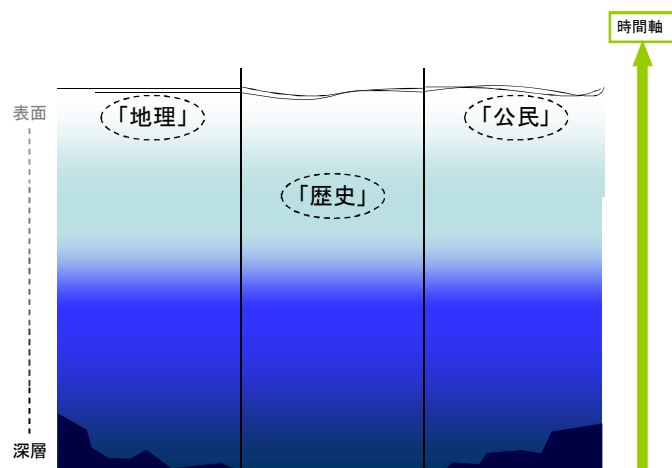


図-10 現在の社会科教育のポジショニング
(バラバラに浮遊する地理、歴史、公民)

歴史教育者でもあったブローデルは、1963年にリセの最終学年（わが国の高等学校3学年）向けの世界史教科書（初版）を作成している。この教科書は、スペインやイタリアでは速やかに翻訳・出版されたが、フランスでは教科書として広く受け入れられることはなく、1970年にはひそかに店頭から回収されている。

この背景には、「伝統的な歴史」（年代や英雄の名前や偉人の武勲や事跡を並べ立てる歴史）のみに終始していた当時のフランス中等歴史教育のあり方に疑問を呈し、「どういう職業に就くにせよ、その準備にとりかかる直前の18歳という年齢の若者たちには、現代の経済問題や社会問題、世界の大きな文化衝突や文明の複数性について、手ほどきをしてやるが必要不可欠だと私には思われるのだ。」といった信念から、急進的な教育改革にチャレンジし、一旦は歴史科カリキュラム改革大綱（文部省官報）に「現代の主要文明」に関する学習を位置付けるという輝かしい勝利を刻んだものの、最終的には「伝統的な歴史」の逆襲に挫折せざるを得なかった、という歴史教育者ブローデルの苦難の歴史がある。（ちなみに、リセの歴史科カリキュラムでは、現在も「伝統的な歴史」を3年間かけて学習することとなっている。）

以下では、ブローデルによって書かれた世界史教科書「文明の文法(世界史講義)」の構造と内容を紹介するとともに（多くのことに気づき、そして学ぶことの出来る教材であるが故に、あえて多くの頁を割いて、その構造と内容を紹介させていただいた。→「表-12」として巻末に掲載。）、前出の高等学校世界史教科書「詳説世界史B」（山川出版）との違いを明らかにすることで、『国土教育』的視点からみた「世界史B」の改善の方向性（私論）としたい。これは、「歴史地理学」を基調とする世界史教科書の作成を提案することに他ならない。

(1) 取り扱う対象の違い

ブローデルが扱っている事象は、文明（その構成要素としての信仰、人間科学、自然科学、哲学、芸術、工業（技術）等）であり、またこれらの基礎構造としての人間集団、民族、都市、交通、国家、空間（＝自然環境）である。特定の個人や事件・出来事に関する記述は、説明上必要不可欠な程度に限定されている。

(2) ストーリーの違い

ブローデル教科書では、文明単位、国家（地域）単位で章・節立てがなされ、それぞれの空間領域の中で、過去から現在までの時間軸に沿ってストーリーが展開されているのに対し、山川出版教科書では、古代から現代に至る全世界の歴史を、ヨーロッパ中心史観に沿った1つのストーリー（1本の時間軸）に押し込めて説明しようとするが故に、ヨーロッパ以外の文明、国家（地域）、民族については、切り刻まれたバラバラの歴史としてしか見ることが出来ない。このことは、信仰（宗教）や人文科学といった歴史にとって極めて重要な事項に気付き、学ぶことができないといった、わが国高等学校世界史教育の大きな障害となっている。

ヨーロッパ文明は、過去（395年）から現在に至るまでずっと、キリスト教と二人三脚で歩んでいるのであり、無宗教を標榜する人ですら彼等の行動規範は全てこのキリスト教によるのである。同様に、アメリカ合衆国は典型的なプロテスタント国家なのであり、民族は違ってもイスラム教を信ずる人々は、イスラム教文明という共通の傘の下で生活しているのである。歴史とは文明ごと、国家（地域）ごと、民族ごとに見ようとしなければ、殆ど意味をなさないのである。

(3) ヨーロッパの位置付けの違い

ブローデルは、「ヨーロッパはアジアの一半島である」「はるか遠き西部（ファー・イースト）」であるというスタンス、ヨーロッパに対して一旦距離をおいて考えるというスタンスに立ち、非ヨーロッパ文明（イスラム、アフリカ、中国、インド、日本等）から執筆をはじめている。また、全体頁数に占めるヨーロッパ（西欧）の記述分量は、山川出版教科書が42%（143頁／340頁）と過半数近くを占めるのに対し、ブローデル教科書では極東の27%（139頁／507頁）に次ぐ23%（116頁／507頁）という扱いである。

しかし、ブローデルはヨーロッパを決して軽視している訳ではなく、むしろフランスという国家が、フランス人こそが、ヨーロッパ中心の世界史の中において、政治・文化の主導的役割を果たしてきたのだという自負を持って、世界史教科書に誇り高き自国フランスの伝統を書き込んでいるのである。これは、「Ⅲ.ヨーロッパ文明－第1部：ヨーロッパ－第2章：キリスト教、ユマニズム、科学思

想」の「ユマニズムとユマニスト」の節、「フランス革命の激越なユマニズム」の下りを読めば一目瞭然である。

(4) その他（日本の歴史に関する記述）

ブローデルは極東の最後の下りで日本を取り上げ、23頁を割いて日本という国の歴史を、日本人の特徴を見事なまでに表現し尽くしている。

- ・「日本は人の住むさいはての国である。」
- ・「列島である日本は、しばしばイギリス諸島と比較されてきたが、しかしイギリス諸島が近接するヨーロッパ大陸に文字どおり接合されているのにたいして、日本はそれよりも孤立し、閉鎖的である状態にある。」
- ・「きわめて早く 6 世紀頃から中国的日本とでもいうべきものが存在してきたし、1868 年からは西洋的日本がはじまり、その大成功は内外から認められている。しかし、こうした数々の重要な経験のそれぞれも、つまりは「日本的」日本の中に溶けこんでしまっている。この「日本的」日本なるものの島嶼的独自性は疑問の余地のないものなのである。小庭園と茶道と満開の桜の国では、中国経由で伝来してきた仏教でさえも日本風につくりなおされてしまう。」
- ・「われわれ西洋の尺度からすれば、日本はほとんど宗教的ではないし、来世にもほとんど関心がないのである。その意味でインドと対照的であるといってもよい。日本にあって支配的なもの、それは、社会や教育や名誉の掟と、そしてもちろんその文明なのである。」

おわりに

F・ブローデルを生んだ「フランス」とわが国「日本」。主な農業の担い手が30歳代・40歳代で100%を超える食糧自給率を誇るEU最大の農業国「フランス」、原子力発電を中心とした積極的なエネルギー政策により約5割のエネルギー自給率を確保している国「フランス」、首都パリだけでなく地方に多くの人口が住んでいる国「フランス」、少子高齢化社会を迎えるなか合計特殊出生率が2.0に回復した国「フランス」、……。かたや、65歳以上の高齢者が農業の担い手の過半を占め、かつ膨大な休耕田を抱えながら主食(穀物)すら海外からの輸入に頼ってし

まう国「日本」、海外とりわけ中東の石油エネルギーに大きく依存している国「日本」、首都東京を中心とした大都市にしか住めなくなってしまった国「日本」、世界中で最も急速に高齢化が進むなか合計特殊出生率が1.4にも満たない国「日本」・・・。

これらの違いは、単に、食糧自給率やエネルギー自給率、大都市居住率、合計特殊出生率といった数字の差として捉えるのではなく、その根底にある「国土」の違いや、「国土」への働きかけの違いとして捉えなければならないのである。そして、それは数十年にわたって蓄積されてきた日仏の初等・中等歴史地理教育の差であるといっても過言ではあるまい。

幕末、オールコックが、「日本の農業は完璧に近い。自分の農地を整然と保つことにかけては、世界中で日本の農民にかなうものはない」と田園と日本農業のありかたに唸ったこと、そして、ハリスもまた「私はいままで、このような立派な稲、このような良質な米を見たことがない」と日本の水田の見事さに驚いていたという事実などは、少なくとも明治以前には現在よりも自立していた「日本」が存在していたことを物語っているのである。

最後に、昭和31年検定済「人文地理」教科書で紹介されていたデンマークの歴史（国民のたゆまぬ努力によって恵まれない自然環境を克服し、豊かな国土、酪農王国を造り上げた歴史）に光をあて、内村鑑三の『デンマルク国の話』を引用することで本稿を締めくくることがしたい。なお、『デンマルク国の話』は短編なので、これまでに読まれたことのない方は、是非とも原典にあたってください。そこでは、本稿で私が述べてきたことの全てが、実証的に、かつ俯瞰的な目線で語られている。

【あらすじ】ドイツ、オーストリアとの戦争に敗れてシュレスウィヒとホルスタインの2州を奪われたデンマークの復興を願う工兵士官ダルガスが、デンマークの領土の半分以上を占める荒漠の地ユトランドに植林を行って沃土となし、外に失った国土を内に求めようとする苦心を描いたもの。ダルガスの苦心の結果、ユトランドの荒野には縦の木が繁り、木材が収穫できるようになったばかりか、気候自体が大きく変化して、良き田園となった。

「ダルガス、 齢は今三十六歳、工兵士官として戦争に臨み、橋を架し、道路を築き、溝を掘るの際、彼は細かに彼の故国の地質を研究しました。しかして戦争いまだ終わるに彼はすでに彼の胸中に故国恢復の策を蓄えました。すなわちデンマーク国の欧州大陸に連なる部分にして、そ

の領土の大部分を占むるユトランドの荒漠を化してこれを沃饒の地となさんとの大計画を、彼はすでに彼の胸中に蓄えました。（中略）彼は単に夢想家ではありませんでした。工兵士官なる彼は、土木学者でありしと同時に、また地質学者であり植物学者でありました。彼はかのごとくにして詩人でありしと同時にまた実家でありました。彼は理想を実現するの術を知っておりました。かかる軍人をわれわれはときどき欧米の軍人のなかに見るのであります。軍人といえ人殺すの術にのみ長じている者であるとの思想は外国においては一般に行われておらないのであります。（中略）

今、ここにお話しいたしましたデンマークの話は、私どもに何を教えますか。

第一に戦敗かならずしも不幸にあらざることを教えます。国は戦争に負けても亡びません。実に戦争に勝って亡びた国は歴史上げっして慚くないのであります。国の興亡は戦争の勝敗によりません、その民の平素の修養によります。善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えません。否、その正反対が事実であります。牢固たる精神ありて戦敗はかえって善き刺激となりて不幸の民を興します。デンマークは実にその善き実例であります。

第二は天然の無限的生産力を示します。富は大陸にもあります、島嶼にもあります。沃野にもあります、沙漠にもあります。大陸の主かならずしも富者ではありません。小島の所有者かならずしも貧者ではありません。善くこれを開発すれば小島も能く大陸に勝るの産を産するのであります。ゆえに国の小なるはけっして歎くに足りません。これに対して国の大なるはけっして誇るに足りません。富は有利化されたるエネルギーであります。しかしてエネルギーは太陽の光線にもあります。海の波濤にもあります。吹く風にもあります。噴火する火山にもあります。もしこれを利用するを得ますればこれらはみなことごとく富源であります。かならずしも英国のごとく世界の陸面六分の一の持ち主となるの必要はありません。デンマークで足ります。然り、それよりも小なる国で足ります。外に拵がらんとするよりは内を開発すべきであります。

第三に信仰の実力を示します。国の実力は軍隊ではありません、軍艦ではありません。はたまた金ではありません、銀ではありません、信仰であります。（以下略）」

謝辞

本研究報告をまとめるにあたり、問題の提起から、向き合うべき素材への気付き、人と国土との相互関係を時間軸と空間軸から見る「国土学」の視点など、俯瞰的で示唆に富んだご指導と格別のご鞭撻を賜った当センターの大石久和理事長に、深甚なる感謝を捧げます。また、当センター情報・企画部の沼尻明子さん、技術・調達政策グループの小川恵理さんには、本研究報告の作成・編集に当たり、ひとかたならぬご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 森田康夫 平成21年12月 『『国土教育』の視点から見た社会科教科書の検証と次世代教育論』 JICE REPORT vol.16 (財)国土技術研究センター
- 2) 文部科学省ホームページ
- 3) 大阪府教育センターホームページ
- 4) 教育研究所(神奈川県高等学校教育会館) 定期刊行物「ねぞす」 42号2008 11月発行、43号 2009 05月発行
- 5) 東京都教育庁指導部 平成21 年8月 『平成22年度使用都立高等学校及び都立中等教育学校(後期課程)用教科書教科別採択結果(教科書別学校数)』
- 6) 高橋彰・平戸幹夫・片平博文・矢ヶ崎典隆・内藤正典・杉谷隆・松本淳・戸井田克己・友澤和夫 平成18年検定済 『新詳地理B 初訂版』 帝国書院
- 7) 佐藤久・西川治(ほか1名) 昭和53年検定済 『高等地理A 三訂版』 帝国書院
- 8) 上野福男・佐藤久・谷岡武雄・西川治(ほか1名) 昭和53年検定済 『高等世界地理B 三訂版』 帝国書院
- 9) 岩田孝三 昭和31年検定済 『人文地理』 帝国書院
- 10) 石井進・五味文彦・笹山晴生・高埜利彦(ほか9名) 平成18年検定済 『詳説日本史 改訂版』 山川出版社
- 11) 井上光貞・笠原一男・児玉幸多(ほか7名) 昭和55年検定済 『詳説日本史 再訂版』 山川出版社
- 12) 宝月圭吾 昭和31年検定済 『四訂 日本史』 山川出版社
- 13) 渡辺京二 平成10年9月 『逝きし世の面影』 葦書房
- 14) 宮本常一 昭和59年5月 『忘れられた日本人』 岩波文庫
- 15) 佐藤次高・木村靖二・岸本美緒(ほか3名) 平成18年検定済 『詳説世界史 改訂版』 山川出版社
- 16) 村川堅太郎・江上波夫・山本達郎・林健太郎 昭和54年検定済 『詳説世界史 再訂版』 山川出版社
- 17) 村川堅太郎・江上波夫 昭和31年検定済 『世界史』 山川出版社
- 18) 謝世輝 昭和63年7月 『世界史の変革 ヨーロッパ中心史観への挑戦』 吉川弘文館
- 19) 溝口晃之 平成19年6月 『高等学校「地理」の様々な問題』 地理学報告第104号 愛知教育大学地理学会
- 20) 滝沢由美子 平成21年3月 『地理教育の現状と課題』 お茶の水地理(Annals of Ochanomizu Geographical Society), vol.49.2009 お茶の水地理学会
- 21) 菊池美千世 平成21年3月 『高校地理教育の変化と課題』 お茶の水地理, vol.49.2009 お茶の水地理学会
- 22) 日本学術会議地域研究委員会人文・経済地理と地域教育(地理教育を含む) 分科会、人類学分科会 平成19年9月20日『対外報告 現代的課題を切り拓く地理教育』
- 23) 独立行政法人大学入試センターホームページ
- 24) 国立教育政策研究所 平成16年2月 『社会科系教科のカリキュラムの改善に関する研究－諸外国の動向(2)－』 「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究成果報告書(18)
- 25) 荒又美陽 『<世界の教科書>フランスの地理教科書』 高等学校地理・地図資料2007年2月号 帝国書院
- 26) 志村喬 『<世界の教科書>イギリスの地理教科書』 高等学校地理・地図資料2006年4月号 帝国書院
- 27) フェルナン・ブローデル(著)、浜名 優美(翻訳) 平成3年－7年 『地中海』(全5巻) 藤原書店
- 28) 浜名優美 平成8年 『ブローデルと地中海の歴史について』 南山経済人クラブ講演録
- 29) I・ウォーラーステイン他 平成11年12月 『『地中海』を読む』 藤原書店
- 30) I・ウォーラーステイン、P・ブローデル他 浜名優美(監修)、尾河直哉(訳) 平成15年3月 『入門・ブローデル』 藤原書店
- 31) フェルナン・ブローデル(著)、浜名 優美(監訳) 平成17年5月 『歴史学の野心 ブローデル歴史集成Ⅱ』 藤原書店
- 32) フェルナン・ブローデル(著)、松本雅弘(訳) 平成7年7月 『文明の文法Ⅰ 世界史講義』 みすず書房
- 33) フェルナン・ブローデル(著)、松本雅弘(訳) 平成8年11月 『文明の文法Ⅱ 世界史講義』 みすず書房
- 34) 木下康彦・木村靖二・吉田寅 平成7年7月 『詳説世界史研究』 山川出版社
- 35) 班目文雄 平成14年2月 『<海外の社会科授業>フランスの地理・歴史教科書』 社会科教室N o 29 日本文教出版
- 36) 内村鑑三 昭和51年1月 『後世への最大遺物・デンマーク国の話』 岩波書店

表－12 F・Braudel『文明の文法(世界史講義)』の構造と内容①

部	章	節	具体的記述内容
Ⅰ.文明の文法			
Ⅱ.非ヨーロッパ文明			
〔第1部〕 イスラム教とイスラム世界 (75頁)	第1章 歴史学が教えること (14頁)		「マホメットとキリストが存在しなければ、キリスト教もイスラム教も存在しなかったであろう。しかしながら、こうした新しい宗教は、そのつど既成の諸文明の総体をつかみ、その魂となった。そうした宗教は、その出発点から豊かな遺産を、すなわち過去を、現在全体を、そしてすでに未来をも、ひきうけるという恵まれた状況にあったのである。」
		イスラム教、近東の新しい形式	・「第二の」文明。キリスト教がローマ帝国の遺産を継承し、発展させたように、イスラム教がその出発点において制圧することになるのは、文明化された人間、民族が出会う、世界で最初の十字路のひとつ、おそらく世界最古の十字路の近東である。
		近東の歴史	・「ギリシャの影響力と戦い、キリスト教に改宗し、たえざる激しい宗教的混乱に動揺する、この近東において、アラブによる初めての征服(634年～642年)にさいしては、あつというまに共謀関係ができたがった。」
		マホメット、コーラン、イスラム	・「マホメットの決定的な活動は、610年ないし612年からその没年の632年までのあいだに位置づけられる。」 ・「のちに「コーラン」としてまとめられる章句と預言者の言行から少しずつ築きあげられた啓示宗教であるイスラム教(「イスラム」は神への絶対服従の意)は、厳格となるような単純性をそなえている。」
		アラビアーほとんど都市化されていない文化の問題	・初期のイスラム教における信仰の中心は「都市」 ・「アラブの諸部族の役割というところを考えると、やがて高度に洗練された文明になるイスラムが、いかにして未開民族をたえずすばやく同化し、「文明化」し、その戦闘的な「諸文化」の活力をよりどころにいかんにかんしてほとんどいつも次々と成功をおさめてきたのか、その方法に目を向けるよういざなわれることになる。」
	第2章 地理学が教えること (14頁)		「イスラムで問題なのは一連の空間、たがいに関連しあい、かなり激しい幾多の変動によって周辺部に影響を被った空間である。」「しかしながら、こうしたさまざまな変動(この空間全体に關係する変動)はいつも相対的なものである。イスラムという巨大な舞合は、おおよそのところ、明らかに安定しており、一連の現実、一連の説明を示しているのである。」
		イスラムの大地と海	・長きにわたるイスラムの海上覇権(インド洋、地中海、紅海、ペルシヤ湾、カスピ海)⇒イスラムの昔日の栄光 ・「こうした大いなる冒険がひろげられたのは、主として地中海においてであった。」 ・「イスラム、それは砂漠である」と評論家エサド・ベイが述べているのは正しいが、しかし、この砂漠、というかむしろいくつもの砂漠の集まりは、一方では、地中海とインド洋という二つの鹹水の広がり、二つの航海の間にあり、また他方では、極東、ヨーロッパ、ブラック・アフリカという三つの人口密集地域の間に位置しているのである。」 ・「人間不足の文明。イスラムはこれまで手近な人間を用いざるをえなかった。慢性的な人間不足はイスラムの根本的な欠乏の一形式である。」
		媒介の大陸あるいは空間⇒運動一さまざまな都市	・道(道路、通路)の存在⇒イスラムの富、イスラムの存在理由、イスラムの文明(運動の文明、中継の文明) ・自然に急進して強い強大な都市⇒巨大な流通を可能にする原動力
	第3章 イスラムの栄華と衰退 (8世紀～18世紀)(24頁)		「イスラムの絶頂期、最盛期は、8世紀から12世紀にかけてのことである。これは衆目の一致するところだ。それに対して、イスラムの衰退はいつの時代にはじまるのだろうか。」「イスラムにとってきわめて恐るべき凋落がはじまったのは、ようやく18世紀になってからのことにすぎない。」「産業革命に失敗したからである。」
		8世紀もしくは9世紀以前にはイスラム文明は存在しない	・「ごくわずかの改宗、多くの朝貢国→征服第一期(アラブ期)は、一帝国、一國家を創出したが、文明はまだ生み出されなかった。」 ・「転換期となったアッバース朝一大々的な政治的・社会的混乱がおこり(さらにのちに知的混乱も加わる)決定的な変化があらわれるのは、ようやく8世紀後半半ばころのことである。カリフの位はアッバース朝の手にわたり、その黒い旗がウマイヤ朝の白い旗にとどかわった。」 ・巨大都市(バグダード、バスラ、カイロ、ダマスカス、チュニス、コルドオバ)の建設→交易を推進する役割 ・言語統一(アラビア語)→文学、思想、イスラム教統合の機運、文明の広が
		イスラムの黄金時代ー8世紀から12世紀	・「まず第一に、全体史の文脈が決定的であることが明らかになる。」 ⇒開明的な専制君主の庇護を受けて育った「平和と全体的繁栄の時代」 ⇒對外拡張の限界→帝国経済の繁栄→市場経済・貨幣経済の出現、農作物の商用化→領主と農民という社会基盤の崩壊→農地紛争や都市暴動→民族主義・資本主義・階級闘争 ・「イスラムの黄金時代を特徴づけるのに、歴史家A・メッツはルネサンスという多義的な語を用いている。」 ⇒商業と富によって特権を与えられた都市社会が支持基盤 ・「われわれがこれまで見てきた時代(813年～1198年)を概観すると、イスラム文明は普遍的であると同時に地域的なものとして、すなわち一に多すぎるものとしてこの矛盾は表面的なものにすぎない一はつきり現れてくる。」 ⇒「普遍性」モスクやマドラサの建築様式、詩や物語、哲学(ファルサフ)、技術や産業(バグダード風) ・「ただし、こうした文化の統一性は、あきらかに根強く残るさまざまな特殊性を破壊してしまうことはなかった。」 ⇒「地域性」イスラム・スペイン、イラン(ペルシヤ語)、ペルシヤ、インド(インド＝イスラム芸術)
		科学と哲学	・「まず最初に科学ー「サラセン人」(この驚くべき時代のイスラム教徒たちはしばしばこう呼ばれた)が最も多く新しいものをもちこんで寄与したのは科学においてであった。」 →三角法、代数、経緯度測定(地理学者、数学者、天文台・天体観測儀)、光学、化学、薬学、医学 ・「哲学の分野においてあげなければならないのは、主として道徳学派哲学の主題の復活と再興であろう。」 →アリストテレス哲学のイスラム世界への移植、イスラムの人文主義、ギリシャ思想
		停止あるいは衰退ー12世紀から18世紀	・「「サラセン」文明は、このうえない栄華を誇ったのち、12世紀をもって突然とどろく。スペインにおいてさえも、科学と哲学の進歩、物質生活の力は、12世紀末期の数十年間をこえて持続することはない。」 ・「イスラム文明はこの衰退を生きのびる。昔日の華やかさ、豊かな美しさもはや見る影もないが、それでもイスラム文明は生き残るのである。」 ・「世界経済全体を再び活気づける数世紀来の好況期ーおおよそ16世紀ーがめぐってくると、イスラムは、東西間を媒介するその位置から新たに利益をひきだすようになった。トルコの栄華は、「チューリップ時代」まで、つまり18世紀までつづくことになる。」
	第4章 イスラム、その今日的再生(23頁)		「多少の差はあれ、遅ればせの、しかしはっきりしたこの衰退が、19世紀においてイスラムにもたらしたのは、一連の屈辱と苦悩、苦痛であり、ついで外国人による支配の拡大である。」「唯一トルコのみがこの共通の運命を免れ、…、そして、これが手本となって、…、かくして、イスラムは、こんにちほぼ完全に解放されているのである。」「しかし、独立を確固たるものにすること、それから「世界の歩み」にに合わせて進み、はっきりと未来を見えることとは、また別の問題であり、後者はもっと困難なことなのである。」
		植民地主義の終焉と民族主義の播期	・「ロシア・ソビエト植民地主義は明らかに、少なくとも3000万に上るイスラム教徒たちに対する手綱をゆるめはしなかったのである。」 ・「汎アラブ主義、分割されたイスラムの政治の金看板ー未解決の国際紛争において、こんにち汎アラブ主義があまりにもやすやすとイスラム教にそっくりそのままとってかわっている。」 ・「ガリバルディの時代」、これがイスラムの現在の標語だ。近東のイスラム諸国の内部では、汎イスラム主義は尖鋭化した激しい地域民族主義と衝突している。」 ・「民族主義には近い未来にはたすべき役割がある。全イスラム諸国は、いかなる国であれ、厳しい緊縮計画をとらざるをえない事態に直面することになるからだ。」
		現代世界に直面するイスラムのさまざまな国々	・「世界の経済生活に同化するためには、イスラムはできるだけ早くその産業革命を実現しなければならない」 ・石油による恩恵;あたらしい都市、道路、鉄道、空港の建設⇒王族や部族首長の時代錯誤的な贅沢 ・人口増加によるさまざまな影響⇒生活水準の低迷 ・解決しなければならない課題⇒農業改善の最優先、製造企業の設立、投資問題の調整、市場の創設、労働者の教育・育成、専門家・技術者・教師・行政官など幹部の育成
		20世紀に直面するイスラム文明	・「イスラムはまだ存在しているのだろうか。イスラム世界の政治的分裂のため、いまなお久しく汎イスラム主義者たちの夢は拒まれつづけているようだ。しかし、事実として、文明の現実として、汎イスラム主義はかつてと同じく現在も存在しているのである。」 ・「第二の問題ーイスラムは、工業化と近代技術に近接するにつれて、その古い伝統的な文明を古びた衣装のように脱ぎ捨ててしまうのだろうか。」→技術、合理主義、マルクス主義に対して備えができていた「キリスト教」との違い
〔第2部〕 暗黒大陸 (36頁)	第1章 過去(21頁)	さまざまな空間	(略)
		暗黒大陸の過去をつらぬいて	(略)
	第2章 ブラック・アフリカ 今 日と明日(15頁)	アフリカの目覚め	(略)
		経済的・社会的争点	(略)
		芸術と文学	(略)

表－12 F・Braudel『文明の文法(世界史講義)』の構造と内容②

部	章	節	具体的記述内容
〔第3部〕 極東 (139頁)	第1章 極東概論(16頁)	地理学が教えてくれること	(略)
		野蛮対文明－歴史の証言	(略)
		はるかなる起源－文化的保守主義の理由	(略)
	第2章 古典中国(26頁)	宗教的側面	(略)
		政治的側面	(略)
	第3章 昨日と今日の中国(18頁)	社会的・経済的側面	(略)
		不平等条約の時代－屈辱と苦悩の中国(1839年－1949年)	(略)
	第4章 昨日と今日のインド(37頁)	新しい中国	(略)
		現代世界と直面する中国文明	(略)
	第5章 海の極東－インドシナ、インドネシア、フィリピン、朝鮮、日本(19頁)	古典インド(イギリスによる植民地化まで)	(略)
		イギリス領インド(1757年－1947年)－近代西洋と苦闘する古い経済	(略)
		インドは中国式革命ぬきでやってゆけるか	(略)
		インドシナ(4頁)	(略)
	第6章 日本(23頁)	インドネシア(8頁)	(略)
		フィリピン(2頁)	(略)
朝鮮(4頁)		(略)	
「日本は人の住むさいはての国である。」「列島である日本は、しばしばイギリス諸島と比較されてきたが、しかしイギリス諸島が近接するヨーロッパ大陸に文字どおり接合されているのに対して、日本はそれよりも孤立し、閉鎖的でよるべない状態にある。」「きわめて早く6世紀頃から中国的日本とでもいふべきものが存在してきたし、1868年からは西洋的日本がはじまり、その大成功は内外から認められている。しかし、こうした数々の重要な経験のそれぞれも、つまりは「日本的」日本の中に溶けこんでしまっている。この「日本的」日本なるものの島嶼的独自性は疑問の余地のないものである。小庭園と茶道と満洲の校の国では、中国経由で伝来してきた仏教でさえも日本風につくりなおされてしまう。」「見るからにとても影響されやすい日本は、多種多様な借用によってきわめて独特な文明を築いてきた。日本はいまでもなおみずからのあらゆる伝統に忠実であり、しかもそうしたさまざまな伝統は、すでにほぼ一世紀も前に強固化に決め手として無条件に急いで受け入れられおしすすめられた西洋化と共存しているものである。この不思議な二元性は、あるジャーナリストの次のような言葉を説明するものだ。「日本で最も奇妙なものは何か？それは日本人だ。」」			
中国文明到来以前の原始日本		・原始アイヌ人、縄文文化と弥生文化、神道と皇室、蛮族アイヌへの対抗、漢字・儒教・仏教の伝来、聖徳太子	
中国文明に学ぶ日本		・古代日本の黄金時代：平城京、平安京、女流文学(仮名文字)、天台宗(浄土信仰)、真言宗 ・天皇制秩序の崩壊(藤原氏→武士)、土農工商、鎌倉幕府→室町幕府→戦国時代→江戸時代(徳川家康) ・鎖国の影響：各種制度の「石化」⇔自国の力だけで存続した日本、豊かさ健康さを示した日本、能や歌舞伎 ・江戸幕府による統制；武士道(忠臣蔵)、厳格な階級制度→豪華さと質しさが同居する国、死刑の横行する日本 ・封建日本の文化・宗教；禅宗(合理主義的新儒教の影響→武士の宗教へ)、「礼儀作法」と「しなやかさ」	
近代日本		・隠遁の世紀の寄与(18世紀)：人口増加、米の生産量の増加、都市の拡大＝100万都市「江戸」、貯蔵・輸送システム高度化、貨幣経済の確立と商人階級の繁栄⇒活発な「前＝資本主義」の開花 ・工業化の奇跡：社会構造の革命的激変なしに産業革命を実現した日本⇔「天皇権力の神秘的性格は現状維持と革命との双方に同時に役だった」 ・戦後日本(第二の奇跡)：高度経済成長とその背景(巨大企業による資本主義、日本銀行の保護政策のもとで確立した大銀行・投資信託会社のシステム、あり余る低廉な労働力、消費意欲ある国内市場) ・今後の課題：農業問題(フランスに比べて人口が多く耕作可能な農地が少ない日本)、資源を海外に依存する日本の工業、政治面・文明の次元(日本伝統主義、天皇制) ・「われわれ西洋の尺度からすれば、日本はほとんど宗教的ではないし、末世にもほとんど関心がないのである。その意味でインドと対照的であるといってもよい。日本にあって支配的なもの、それは、社会や教育や名譽の徒と、そしてもちろんその文明なのである。」	
Ⅲ.ヨーロッパ文明			
「われわれはこの研究を非ヨーロッパ文明からはじめた。すなわち、イスラム、ブラック・アフリカ、中国、インド、日本、朝鮮、インドシナ、インドネシアの諸文明である。ヨーロッパは世界の中心ではない、もはやそうではないのだということをよりよく納得するには、ヨーロッパにたいしてある程度距離をおいた方が、異郷に身をおいてみた方が、よいからだ。ヨーロッパは非ヨーロッパ。世界を根本的に説明しようとする企てはいかなるものであれ、やはりこのきわめて大きな対立にまだなお抱えているのである。さていまや、われわれはわれわれ自身に、ヨーロッパに、その輝かしい諸文明に、立ち戻ろう。」			
「ヨーロッパはアジアの半島である」ということ。つまり、ヨーロッパは「アジアのひとつの小さな岬」というわけである。」			
〔第1部〕 ヨーロッパ(116頁)	第1章 空間と自由(25頁)	「ヨーロッパの運命はこれまで、個別的な自由、つまり自治権というもの－大小さまざまないくつかの集団に与えられる特権－のたゆみない発展によって支配されてきた。こうしたさまざまな自由は、しばしば対立しあい、排除しあいさえする。もちろん、こうした自由は、西ヨーロッパが均質的な統一空間として、安全な家として、成立するようになっはじめて問題となりえたのであった。家が守られていなければ、その時にはもちろん自由も存在しえない。この二つの問題は表裏一体をなしているのである。」	
		定義されるヨーロッパ空間－5世紀から13世紀	・ヨーロッパ空間(半島西端部のまとも；ファー・ウエスト)は、ローマ帝国の東西分裂(395年)にはじまり、その後の三方の辺境での大変動(ライン河・ドナウ河沿いへの蛮族の侵入、イスラムによる地中海沿岸部(イベリア半島・シチリア島)の征服、デンマークからジブラルタルに至る沿岸へのノルマン人の侵略)によって創り出された。 ・11世紀から12世紀にかけて、ゆるぎない封建制のもと、ヨーロッパ文明は第二次・第三次の発祥期に入っていった。 パリもロンドンもミラノもケルンも、すべて「唯一無二のキリスト教世界」(マルク・ブロック)に統一された。
		自由、あるいはより正確には、さまざまな自由－11世紀から18世紀	・「はてしないこの歴史のなかで時間的にも空間的にも最も頻出する問題は何かと興味津々問うてみると仮定しよう。そうすれば、それは必ずまちがいないヨーロッパの自由、より正確には、さまざまな自由の問題ということになるだろう。自由という言葉がキーワードになるのである。」 ・ 集団的「自由」 ⇒農民の自由(開放)→都市の自由(遠隔地交易による都市経済の拡大)→領域国家(近代国家)の政治的自由(＝特権集団の自由) ・ 個人の「自由」 ⇒1789年の「人権宣言」における明確な表現が、大多数の自由(全体の利益、特殊な自由、特権)から個人の自由(法の前の平等)への変革点となった。
	第2章 キリスト教、ユマニズム、科学思想(40頁)	「ヨーロッパの信仰生活、知的生活は、激しい変化にいらだてられてきた。それは、よりよい世界をたえず求めて、断絶や不連続や波乱を好み、つくりだしてきた。とはいえ、そうした劇的な変化に目をつばはられて、その思想と文明の強固な連続性を見失ってはなるまい。この連続性は、聖トマス・アクィナスの『神学大全』からデカルトの『方法序説』にいたるまで、ヨーロッパ思想のたえまない経験すべてををつらぬき、さらにはルネサンス、宗教改革、フランス革命そのものをもつつぬいて、あきらかに見てとれるものである。産業革命は重大な断絶をもたらしたしたが、ヨーロッパの生活の全領域、ヨーロッパ思想の全領域を揺るがしたわけではなかったのである。」	
		キリスト教	・ミラノ勅令によりローマ帝国の公認宗教となつて以来、キリスト教は西洋の歴史を通して一貫して文明の中心であり続けてきたし、現在もそうである。これは、ヨーロッパ思想の重要な構成要素としてであり、一方で、キリスト教に抗しつつもキリスト教から出発して形成されてきた合理主義思想の重要な構成要素としてもである。
		ユマニズムとユマニスト	・「 ユマニズム(humanisme、人文主義) は、人間の運命の改善あるいは改変の可能性をたえずにらみながら、人間の漸進的開放に向けて行かう飛躍であり、戦闘的な歩みである。」 ・ルネサンスのユマニズム⇒「ルネサンスのユマニズムは、ローマとローマの、異教ローマとキリスト教ローマの、古代文明とキリスト教文明の、対話としてあらわれた。」 ・宗教改革(プロテスタント)のユマニズム⇒2大プロテスタント主義(農民ルターと都会人カルヴァン)、聖書の自由な検討と歴史的批判、理神論的合理主義を目指した自由な活動 ・フランス革命の激越なユマニズム⇒「 革命的ユマニズムが示すのは、何よりも、暴力の合法性、法律と平等と社会主義と熱愛の祖国に奉仕する暴力の、その合法性なのである。この暴力は革命家がその張本人にもなれば犠牲者にもなるものだ。というのも、「街頭に出て戦う」ということは、勝利をおさめるためであると同時に、最後の抗議を叫びつつ街路に倒れることでもあるからだ。しかし、暴力の勇気－死ぬ勇気、あるいは殺す勇気－は、それが運命を動かし、運命をより人間的に、より親しいものにする唯一の手段であるときだけにしか認められない。ようするに、革命とは理想に奉仕する暴力なのだ。 」
		19世紀以前の科学思想	・西洋科学の3つの世界体系⇒「アリストテレスの体系」→「デカルトとニュートンの体系」→「アインシュタインの体系」 ・デカルトの『方法叙説』賛美 ・資本主義的緊張を乗り越え(＝相伴する2つの独自性「科学」と「工業化」の反響を引く出し)、18世紀の前代未聞の経済的飛躍を経験したヨーロッパ⇔経済的飛躍を経験することが出来なかった中国

表-12 F・Braudel『文明の文法(世界史講義)』の構造と内容③

部	章	節	具体的記述内容
〔第1部〕 ヨーロッパ(116頁)	第3章 ヨーロッパの工業化 (25頁)		「ヨーロッパの重要な責任のひとつそれは、世界に広がり、いまなお広がりにつつある産業革命を現実になしとげたことにある。技術の驚くべき進歩はヨーロッパがうみだしたものだが、文明の歴史の尺度から見れば、ごく最近の所産にすぎない。せいぜい二世紀になるかならないかというところからである。」
		最初の産業革命の起源へ	・前＝産業期のヨーロッパには企業家も資本も労働力も存在した。→マニュファクチュア ・イギリスで始まった産業革命→経済発展が基幹産業を刺激→技術革新が応える→科学の進歩(科学と技術の協働関係) ・背景として存在していた、18世紀におけるイギリス人口の急増、イギリス農業の変容(土地囲込み、科学的な方法の導入)
		ヨーロッパ(およびヨーロッパ以外)における工業化現象の拡散	・工業化の3つの段階⇒「離陸(1つ2つの基幹産業の急速な近代化と当該部門の蓄積)」→「隣接部門に近代化が広がり、経済は全体として工業化の成熟期に達する」→「選択の時に当たっては社会全体に受け入れられるような生活様式を選ぶことが重要(戦争、進歩的な社会政策、大量消費、・・・)」 ・工業化による信用取引、金融資本主義、国家資本主義の拡大。植民地主義が工業化に与えた影響。
		産業社会に直面する社会主義	・「工業化はたとえ成功しても最初から深刻な社会問題をひきおこすということをヨーロッパは例証している。したがって、ヨーロッパを苦しめ悩ませた革命イデオロギーが長期にわたって胚胎するのを回避しようとするなら、工業化をめぐす国は同時にその社会構造を見直さなければならない。」 ・「革命的・イデオロギー的段階」→「組織的労働闘争段階(労働組合および労働者政党)」→「政治的段階、国家的段階」
	第4章 ヨーロッパのさまざまな統一性(25頁)		「これまでの章において示されてきたのは、ひとつのヨーロッパであった。それは、宗教、合理主義思想、科学技術の発展、革命と社会的平等への志向、数々の華々しい成功など、ひとつの同じ全体的な運命をもとにするヨーロッパであった。しかしながら、こうした「調和」をこえて各国の隠れた多様性を見いだそうと思えば、いくらでも容易にそうできるだろう。そうした相違はふんだんにあり、根深く、必然的なものであるからだ。」
		輝かしい統一性－芸術と精神	・「ヨーロッパにおいては、いかなる芸術形式も、その祖国の境界をのりこえる。」 ・「哲学もまた統一をめざすメッセージである。」 ・「客観科学は、その最初の成功の時から、ヨーロッパにおいては厳密に唯一のものだったのである。」 ・「人間科学についていえば、その動きは、たとえば哲学の動きと同じように、むしろ国ごとの動きとしてあらわれ、そうしてすばやくヨーロッパ全体に広がっていく。」 ・「文学が示す統一性は最も不完全なものだ。」
		堅固な統一性－経済	・「地域経済あるいは国家経済の多様化にもかかわらず、ヨーロッパは経済的な絆で昔から結びついてきたが、この経済的な絆をまとめあげてあらゆる部分が全体的に従属するような統一をなしとげることができるか」 ・「経済的な不安⇒「ヨーロッパ共同市場のヨーロッパ内での限界」「ヨーロッパ外での限界」「適応困難な農業がなげかける域内の問題」
		偶然に左右される統一－政治	・「19世紀は、「ヨーロッパ均衡」も「ヨーロッパ協調」も「勢力均衡」もつくりだしはしなかった。」 ・「力による統一の挫折－この単調な歴史からひきだされる唯一の教訓は、だれてあれヨーロッパという家全体を奪い取るには力だけでははけて十分ではなかったということである。」 ・「こゝにちヨーロッパの政治的統一は、力によってではなく、関係国の共通意識によってなしとげることができるか。プログラムはできあがっており、あきらかに統一への機運も高まっているが、・・・」
〔第2部〕 アメリカ(94頁)	第1章 もうひとつの新世界－ ラテン・アメリカ(30頁)	空間、自然、社会－文学の証言 (略)	
		人種問題にたいして－ほとんど兄弟姉妹のように (略)	
	第2章 典型的なアメリカ－ アメリカ合衆国(23頁)	試練に立つ経済、文明 (略)	
			「長いあいだアメリカは、過ぎさった日々に少しもわずらわされず、あたらしい運命を生きているのだと信じてきた。過去はすぐさま自然に消費されていったのである。しばりつけようとするもの、根づかせようとするものから逃れられし、予断させるものに賭けるべし－アメリカはこれを金科玉条のようにしてきたのである。キーワードは「機会(オポチュニティ)」－めぐって来た好機、チャンス－という語だ。人間と名のつく者ならだれでも、めぐって来た「好機」をつかみ、最大限それを生かさなければならぬ。そうした「競争」のなかでこそ、自己主張もできれば、自分の真価も示せるというわけだ。これがアメリカ合衆国の集団としてのふるまい方であった。」
		植民地化と独立	・アメリカ東沿岸地帯の征服⇒スペイン人(フロリダ)とフランス人(カナダ)の狭間にあって、ボストン・ニューヨーク・フィラデルフィアを軸に、圧倒的な数位的優位をもって実現(「フランス人7万人」:「イギリス人100万人」)。 ・アメリカの初期の発展を支えた農業経済と漁業(大捕鯨時代)は、「海運の隆盛」に支えられていた。この海洋志向は、遙か彼方での冒険をとまない、新たな発見をみちびいた。その後、イギリス蒸気船との熾烈な競争で大打撃を受けたアメリカは、海洋志向から内陸(西部)志向へ転換。→鉄道や沿岸・内陸航路の整備へ ・独立宣言と憲法の本質⇒「自由と平等の名においておしつけられる秩序とは、既に資本主義の秩序である。」「アメリカ憲法がめざすのは、つねに利己主義的で残忍な動物たる人間のさまざまな衝動をそれぞれたぐいにつりあわせることだからである。」
		西部征服	・「地理的拡大は、一経済であれ、一国家、一州であれ、もちろん一文明であれ、あらゆる発展のまず最初の形態なのである」 ・西部征服を可能とした背景の一つは、資本主義が最初から原動力となっていたこと。西部開拓者は「農民」ではなく「相場師」であったし、また、州議事堂は都市の拡大を想定し郊外に建設された。 ・もう一つは、西部征服を成し遂げたアメリカ人が「プロテスタント」であったという事実。彼等がフロンティアとなって、「アメリカ流生活様式」のモデル(＝アメリカ文明のパターン)をつくりあげることとなった。
	第3章 影と困難－昨日から今日へ(25頁)	工業化と都市化	・工業化の背景⇒「ヨーロッパからの労働力の到来(西部のみならず、産業や巨大都市の建設はアメリカだけの力で成し遂げられたものではなかった)」「アメリカ流生活様式」という言語(移民を引きつける新世界の巨大な牽引力)」「アメリカ文明の基本的要素⇒個人の尊重、社会奉仕活動等を重視する信仰(カトリック含む)、英語の優位」 ・「アメリカ社会では階級間の境界を示すのは金銭だけだし、富への道は、少なくともごく最近まではだれにでも大きく開かれているように見えていた」→フロンティア、工業化、大都市の発展などアメリカの「チャンス」の豊富さ
			「アメリカ合衆国にも困難があり、危機のきざしがある。しかし、その状態は健全で活力がみなぎり、おそろくみずから考える以上に良好さを保っているのだ。」
	第4章 イギリス連邦をめぐって(16頁)	古い悪夢－黒人問題あるいは根絶できぬ植民地	・植民地化に際して最初に侵略を受けたインディアンは滅亡した民族の代表として保留地で生き延び、黒人は民族少数派として変わらぬ境遇の中であいかわず重圧にたえている。 ・南北戦争、権利保障の法制化など、黒人問題解決に向けた取り組みは進められているが、「その歩みは絶望的なほど鈍い」。→黒人問題はアメリカが乗り越えるべき課題であり、それによって自らを試し、高める契機となる。
		資本主義－トラストから国家介入と寡占へ	・「お金はアメリカの理想とする自由民主主義において王のごときのものであった。そしていまでもなおそうだ。・・・しかし、この資本主義、この自由な需要供給ゲームは、世界に比類なき物質的繁栄をもたらしてきた。そして世界各國が、政治体制のいかにかわらず、右へ倒れてわれがらに繁栄をもとめようとするところみているのである。」 ・アメリカ資本主義の発展形態⇒トラスト(19世紀末)から大企業2・3社による巨大な国内市場支配(寡占)＋労働組合、国家(連邦政府)という補正権力が存在する「新＝資本主義」へ ・社会機構への国家の介入⇒アメリカ文明の桁はずれの個人主義、自立主義
		世界と向かい合うアメリカ合衆国	・世界があまりにも狭くなり、アメリカの一挙手一投足が否応なしに世界に大きな影響を及ぼすようになってしまった。→「孤立主義」の長い伝統に安住できなくなってしまったアメリカ ・「強い者はそれにふさわしくふるまうべし(ビュイサンス・オブリージュ)！」(＝ノブレス・オブリージュのもじり)－後退の危機にさらされないよう世界の中で生きることさえしなければならなかったアメリカ合衆国が世界の先頭におどりてのは、その国力(ビュイサンス)の驚異的な発展の結果であった。その国力を定義するには、経済的、政治的、科学的、軍事的、世界的等々、あらゆる形容詞を総動員しなければならない。
		カナダ－フランスとイギリス	(略)
〔第3部〕 もうひとつのヨーロッパ－ モスクワ、ロシア、ソ連(47頁)	第1章 起源から1917年の10月革命まで(20頁)	ロシア正教会	(略)
		大ロシア	(略)
		カール・マルクスからレーニンまで (略)	
	第2章 ソビエト連邦 1917年から現代まで(26頁)	マルクス主義とこゝにちのソビエト文明 (略)	
		1961年10月の党大会	(略)